

恨み地蔵

ヨコテ

長い間続いた戦乱の世も終わる気配を見せ、城下には人々の喜びに満ちた、活気溢れる声が響いていた。荷物を担いだ商人や先を急ぐ武士など、多くの旅人が行き交っている。新しい時代に一旗揚げようと目を輝かせている者もいれば、時代から取り残されてしまったあぶれ者もいた。交通の要所だけに、城下には雑多な人間が集まってくる。

旅人を引き留めようと宿屋の女中が威勢のいい声を張り上げる。羽振りのよさそうな旅人には、うちに泊まってくださいよ、と半ば強引に手を取っている。女中の勢いに押され、断り切れずに中へ放り込まれた旅人は、仕方ないな、と満更でもない苦笑を浮かべる。女中は次の獲物を狙うべく、通りに目を光らせる。懐手にした身なりのいい浪人が通り過ぎる。浪人は見極めが難しい。女中は声を掛けることなく見過ごした。浪人の中には混乱の世から抜け出せない者もいて、関わりになって面倒を起こされてはかなわない。身なりのいい浪人ほど昔の矜持を捨てきれないで妙な難癖をつけたりする。女中は浪人が通り過ぎると、再び威勢のいい声を通りに響かせた。

通りの露店では野菜や魚などを台に並べて売っていて、ここでも威勢のいい声が飛び交っている。通りの奥には乾物や金物などを売る店が軒を連ね、荷物を運ぶ人足や客でごった返している。それはまるで新たな戦場が出現したような騒ぎだった。

そんな城下の一角に、小さな一膳飯屋がある。喜助という親父が二年ほど前からやっており、安くて旨いと評判だった。いつも賑わっていて、それは娘のお勢に負うところも大きかった。お勢は美人で愛嬌もあり、働き者だった。世の常で、お勢を目当てに来る客も少なくない。

吉次もそのひとりだった。金物を商売にしている多良屋に子供の頃から住み込みで奉公にあがっていた吉次は、喜助が店を開いたときからの馴染みで、毎日のように通う吉次をお勢も憎からず想ってくれているようだった。いつしかふたりは逢瀬を重ねるようになった。

所帯を持ちたいと思い始めた吉次は、村に一人で暮らしている母を城下に引き取ろうと考えていた。母のお節は城下から歩いて半日ほどの村に、今でも一人で暮らしている。戦にとられた父が亡くなり、あとを追うようにして長兄が病で死んだとき、吉次は多良屋での仕事が面白くなって、村に帰って百姓をしようとは考えなかった。休みをもらって村に帰り、一緒に暮らそうと提案したが、母は首を振るばかりだった。決まって、この歳で村を離れたくない、と云う。生まれてこの方、一度も村を離れたことのない母が新しい生活に踏み出すのを恐れているのだろうと思った吉次は、俺がいるから心配することはない、と説得した。それでも母を翻意させることは出来ず、お勢との新居を城下に構えてからまた話し合えばいいだろう、と吉次は心算した。

そんなとき、吉次は多良屋の大旦那に呼ばれた。お勢との仲は使用人たちにも知られるようになっていたので、祝いの言葉でもかけてもらえるのかと、少し浮ついた心持ちで大旦那の待つ座敷に入ると、すぐさまそんな雰囲気ではないのを吉次は察した。大旦那は険しい顔をされており、脇に控えている番頭は叱られたあのようなようだった。何があったのは知らないが、吉次は少しばかり胸のすく思いがした。番頭は人使いが荒く、とりわけ自分に嫌な仕事を押しつけることが多いように吉次は感じていた。

情けない姿を見られて恥ずかしいのか、番頭が顔をそむける。

「お呼びでございましょうか」

大旦那の正面に座ると、大旦那の険しかった顔が困り果てたように変わった。

「このところ、店の売上げが落ちているのを知っているか？」と、吉次を見据えて云った。その視線がゆっくり隣の番頭に移る。大旦那の顔がまた険しくなった。番頭が叱られたのはそのことが原因のようだ。

「はい」と、吉次は短く答えた。気にはなっていたが、自分のような使用人が考えることではないので、それ以上何も云わなかった。

「世の中が平和になったのはいいが、刀鍛冶が鞍替えを始めた。鎌や包丁を作るようになり、お陰で商売敵が増えてしまった。今までは城下や近在の村を相手に商売をしていればよかったが、これからはそうもいかん。多くの使用人を抱えているから、これ以上売上げが減ったら死活問題になる。今の状況が続くようなら使用人を減らさねばならない」

吉次は驚いた。そこまで多良屋が追い込まれていたことにも驚いたが、それよりも白羽の矢が、真っ先に自分に向けられたことが衝撃だった。奉公にあがって十数年、多良屋のために必死で働いてきたという自負はあるものの、所詮はただの奉公人に過ぎない――。

「わたしに辞めろとおっしゃるので……」

吉次の脳裏にお勢の姿が浮かんだ。多良屋を辞めさせられたら、お勢と一緒にしてくれとはとても云い出せない。石にかじりついても今の生活を守らねば、この先に待っている幸福を掴むことは危うくなってしまう。

怖ず怖ずと訊く吉次に、大旦那の目が少しだけ笑った。

「お前は相変わらず早とちりだな。誰が辞めさせると云った。もちろん、今のままならそうなるかもしれないが、そうならないために今まで以上に立ち働いてもらわねばならない」

「多良屋の一大事となればこの吉次、命に代えても出来る限りのことをさせていただきます」

ひれ伏して吉次は云った。

「お前ならそう云ってくれると思っていた。聞けば、好きな女がいるそうだな」

「はあ」と顔を赤らめ、吉次は面を上げた。

「そんな果報者を辞めさせるほど僕は薄情ではないぞ。その女のためにも働いてくれると信じている。そこでだ、さっきも云ったがこれまでは近くを相手に商売をしていればよかった。しかし、これからはそうもいかん。新たな販路を隣国まで拡げようと思っている。山越えになるので大変だとは思いますが、やってくれるか？」

「はい、喜んで務めさせていただきます」

威勢よく返事をして吉次は頭を下げた。何とか多良屋にとって自分が有用な人間であると証明してみせねばならない、と胸中で肝を据えた。

詳しいことは後ほど報せるということで、吉次は座敷を辞した。

その日、一膳飯屋がはねたあと、吉次はそっとお勢を堀端に呼び出した。青い月が頼りなげにお勢を照らしている。

「大事な話がある」

吉次が切り出すと、青白かったお勢の顔に赤みが差した。お勢が恥ずかしそうな嬉しそうな、何かを期待する目で吉次を見る。それが何かは吉次にも分かっていたが、今は云うわけにはいかなかった。

「ひと月ほど旅に出なければならなくなった。お勢に会えなくなるのは寂しいが、これも先々のことを考えると仕方のないことだ、我慢してくれ」

お勢の顔に落胆の色が浮かんでいた。しばらく会えないことに気を落としているのではなく、肝心の言葉を聞けなくて失意しているようだった。

「何だ、そんなこと。ひと月なんてあっという間よ。わたしは大丈夫。それより、山越えが心配だわ。山賊や野武士は減ったらしいけど、まだまだ出るんでしょう？」

「追い剥ぎくらいならいるかもしれないが、ひとりで行くわけじゃない。三人で行く。頭分の庄助さんと俺と下男の三人だ。本当はもう少し人数を増やして警護の侍も雇いたいところだが、今の多良屋にそんな金はないそうだ。自分の身は自分で護らなければならない。しかし、明るい陽のうちなら峠道にも行き交う人はいるだろう。心配することはない」

お勢を安心させようと、吉次はにこりと微笑んでみせた。だが、お勢の杞憂は晴れなかった。「おいおい、そんな顔をしてたんじゃ旅にいけないじゃないか。万が一のために俺も庄助さんも刀を差すことになったんだ。人を斬ったことはないが、いざとなったら俺だって……」

「違うの。そうじゃないの」

「何が……違うんだ？」

「多良屋さんて危ないの？ そんな風に見えないけど」と、お勢が顔を曇らせる。

自分のことよりも多良屋のことを気にしているお勢に、吉次は少しばかり鼻白んだ。が、目と鼻の先にある多良屋が潰れてしまっただけでは飯屋も影響を被るのは明らかで、お勢はそのことを危惧しているのだろう。当然のことだ——吉次はそう思うことにした。

「よくないな。以前ほど店に活気がない。俺は今のところ大丈夫だが、何人かは辞めていくようだ。それでも今度の旅で売らなければどうなるか分からない。売るか辞めるか……。もちろん売ってみせる。託された金物を全て売ってやる。そうすれば辞めなくて済むし、そしたら」

肝心の言葉を言おうとしたところで、お勢が口を挟んだ。

「わたし、お父つぁんにふたりのことを話したのよ。こうして会ったりしているから心配をかけちゃいけないと思って……。それで、お父つぁんが云うには……」

お勢が云いにくそうに口を噤む。

「喜助さんは何と云ったんだ？」

吉次は気が急いでいた。行く度に愛想のいい顔を向けてくれるが、それはあくまで客に向けられた笑顔であり、本音のところでは自分をどう思っているのかは分からない。嫌われているはずはないと思うが――

吉次の催促にお勢が意を決して話を始めた。

「吉次さんのことはいい人だって云ってるわ。店を開いた頃からの馴染みだし、気心も知れているし……。でもね、わたしたち、父娘ふたりきりでしょう、だから婿を取りたいんだって。お父つあんはわたしに傍にいて欲しいのよ。わたしも傍にいてあげたいの」

「婿か……」

吉次の顔に暗い陰が差した。

婿になることなど考えもしなかった。お勢と一緒にになったら城下にふたりの新居を構え、これまでどおりに多良屋で働くものと考えていた。お勢はそのまま父親とともに飯屋で働いてくれてもいい――漠然とそう思っていた。

「ちっぽけな店だけど、お父つあんにとっては命なのよ。喧嘩が元で村を追われて、何とか築くことの出来た大切な店なの。わたしもあの店が好きだわ。お父つあんが築き上げた店をわたしも護っていきたいの、お婿さんと一緒に」

「飯屋か……」

吉次はまたぼつりと呟いた。喜助やお勢がそれほど思い入れを抱いているとは考えたこともなかった。あんな店といったら悪いが、吉次にとってはただの一膳飯屋、何処にでもある何の変哲もない飯屋に過ぎない。一緒になったらあそこで働けというのか――。吉次の胸中は暗く揺れた。

「嫌？」と、吉次の横顔を盗み見するようにしてお勢が訊く。

「嫌も何も……考えてもみなかったことだからよく分からない」

「わたしは旦那様も大事だけど、お父つあんも大事なの。それを分かって」

伝えるべきことは云いきったと、お勢は吉次に背を向けて駆け出した。

一膳飯屋へと帰るお勢を見ながら、吉次は思い悩んでいた。今度の旅を成功させ、先の話だがゆくゆくは多良屋から独立し、何か商売を始めようと考えていただけに、一膳飯屋で働いている自分の姿をどうしても思い描けなかった。村に残している母のためにも吉次は金を稼ぎたかった。旅は三日後に迫っている。その間は準備に追われ、お勢と話をする時間は作れない。旅から帰った際にまた話し合いをしなければならないが、上手く説得できるだろうか――。

出立の朝になった。旅装束に刀を差した吉次と庄助は多良屋の前で、大旦那から激励と訓戒を受けていた。大旦那の傍らで番頭が、もっともでございます、と頷いている。下男の弥平は荷物を積ませた馬の手綱を持ち、吉次たちの後ろに控えていた。朝の光がようやく昇り始め、ふと見やると辻の向こうにお勢の姿があった。朝の早い時刻だったので見送りに来てくれるとは思ってもおらず、吉次の心は浮き立った。三日前のお勢の言葉に少しばかり沈みがちだっただけに、吉次は救われた思いがした。その浮ついた目を番頭に見られた。キッと吉次を睨み付けている。さすがにばつが悪くなり、吉次は俯いてしまった。大旦那の話が終わると、庄助たちがゆっくりと歩き始めるのを尻目に、急いでお勢の元に走り寄った。背中の重い荷物も腰の刀も全く気にならなかった。出立に間に合うようにわざわざ来たということは、何か火急の用事があるのだろう。お勢の穏やかな顔から察するに、それは悪いことではないようだ。

「来てくれたのか……」

お勢の前に立ち止まって声を掛けると、お勢はこくりと頷いた。

「はい、これ」と云って、お勢が手を差し出す。手にはお守りが握られていた。城下の外れにある神社のお守りだった。道中の安全を願って昨日買ってきたと云う。

「ありがとう」とお礼を云い、お守りを受け取ると吉次は、しばしの別れを惜しむお勢の言葉を待った。しかしお勢は何も云わず、遅れてやってきた庄助に目を向けた。庄助たちが目の前に来ると、馬に怯えながら庄助にもお守りを手渡した。

「道中、お気をつけて」

気を遣ってもらって申し訳ないな、と庄助が吉次を見る。庄助もふたりの仲は知っていて、吉次は笑顔で頷いた。内心は、お勢の気遣いが自分だけに向けられなかったことが不満でならなかった。その不満がさらに増した。お勢が下男の弥平にもお守りを与えたのである。

「あっしなんかにもったいねえ……」と、弥平は受け取ろうとしなかった。

「道中が危ないのは皆同じです」

お勢が弥平の手の中にお守りを無理に押し込むと、弥平もそれ以上拒もうとはしなかった。お守りを押し頂き、嬉しそうな顔を見せた。

吉次は、足が勝手に動き出した。

「先を急ぎましょう」と庄助に呼び掛け、すたすたと歩き始めた。遅れまいと、庄助と弥平が慌ただしくあとからついてくる。

「お勢さんはなかなか気が利くな」

庄助にそう云われても、吉次の顔は強張ったままだった。

「そうでしょうか」

「そうとも。しかもこんな早くから待っているなんて出来ることじゃねえ」

「早起きなだけですよ」

にこりともしないで吉次が云うと、庄助は訝しそうな顔をした。

「どうかしたのか？」

「何がですか？」

「いや、面白くなさそうだから……お勢さんと喧嘩でもしたのかと思って」

「そんなことはありませんよ。わたしはいつもどおりです」

「ならいいんだが……」

それきりふたりの間に会話はなくなった。黙々と歩く三人の背中を朝の光が照らしている。

多良屋を出たとき、辺りには三人の姿しかなかったが、今では同じような商人がちらほらといた。落ちぶれた浪人風の侍もいたりして、擦れ違う際には緊張が走った。吉次もそうだが、庄助も弥平も旅に慣れてはいない。隣国へ行ったことのある者はおらず、不慣れな街道に不安を覚えながら三人はとぼとぼと歩いた。この旅が上手くいくのか、誰にも分からなかった。持った荷物が果たして上手くさばけるのか。はたまた途中で賊に襲われて奪われないだろうか。荷物を奪われるだけならまだしも、命を落としたりしないだろうか。一応、護身用に刀を差してはいるが、あくまでも見せかけで実際には役に立たない。吉次も庄助も人を斬ったこともなければ振り回したこともすらなかった。あくまで気休めに過ぎず、賊に遭わないのを祈るのみだった。もしそうなったら庄助は命がけで戦うだろう。弥平はすかさず逃げるだろう。自分は——その場になってみなければ分からない、と吉次は思った。

田畑の広がる遙か向こうに山が見え始めた。あそこを越えるのかと思うと、吉次の心は早くも萎えそうになった。重い荷物を背負い、慣れない刀を差して歩くだけでも大変なのに、勾配のある峠の山道を登らねばならない――。

「そろそろこの辺りで商売を始めてはどうですか？」

陽が高くなり、いくつかの村を過ぎて吉次は云った。畑のあちらこちらで男が鋤を振っており、背中の荷物が減らせるかもしれないと思った。

「まだ早い。売るのは山を越えてからだ。そう大旦那からきつく云われている」

にべもなく庄助が云う。

「ですが、少しでも荷物は減らしておいた方が……」

「この辺りは城下に近い。必要になれば買いに来てくれるだろう。農らが目指しているのは峠を越えた隣国の、滅多にももの買いに行くことの出来ない村々だ。そういった地域に新たな販路を求める――大旦那はそうおっしゃっていた」

それは吉次も聞いていた。新たな販路に活路を見だし、多良屋の再建につなげる――それは理解していた。しかし、この荷物を持ったまま峠を越えられるかどうか、そのことが吉次にとっては現実問題だった。

「このままだと馬が弱ってしまいますよ」と、吉次は振り返って馬に視線を這わせた。庄助もつられて振り返る。

「そうか……。農にはそうは見えんが……」

馬の足取りは軽やかだった。足の動きとともに、荷物が規則正しく左右に揺れている。

「今は大丈夫でしょうが、先々のことを考えますと、あまり無理はさせられません」

「弥平、馬の様子はどうだ？」と、庄助が訊く。

「へい、まだ元気なようです」

大丈夫だよな、と弥平が馬の面を撫でる。

「だそうだ。先のことを考えるのはいいが、お前は少しばかり心配しすぎだ」

庄助にそう云われると、吉次は何も云えなかった。馬にかこつける吉次の目論見は外れた。

誰に見咎められるわけでもないのに、大旦那の言い付けどおりに事を運ぼうとする庄助を、くそ真面目で融通の利かない奴だと思った。

再び三人は黙って歩き続けた。吉次に云われたからか、庄助は自分たちや馬の疲れを考慮してたびたび休みを取ってくれた。吉次はその度に生き返る心地がした。始まったばかりだということに、重い荷物を背負っての旅は思っていた以上に過酷なものだった。

休みがちだったせいで、山の麓に着いた頃には陽が翳り始めていた。急がないと陽のあるうちに峠を越えられそうになかった。街道は狭い山道になり、うっかりしていると谷へ落ちそうだった。それでなくとも辺りには吉次たちしかおらず、吉次は心細さが募った。山賊が出るかもしれない。

「急ごう」と云い、庄助が背中荷物を揺すった。

庄助も同じ思いだったようだ。日暮れは近い。こんな山の中で野宿する羽目にでもなれば、賊に襲われなくとも獣に襲われるかもしれない。皆は疲れ切った足を踏ん張り、山道を急いだ。

すると、山道の脇にこぢんまりとした家が見えてきた。茶屋のようだ。皆の顔に安堵が浮かぶ。休めるところなどないと思っていただけに、疲れが一気に襲いかかってきた。

「あそこで休むとしよう」

心底ほっとしたように庄助が云う。

吉次も胸を撫で下ろしたが、それは一瞬で潰えてしまった。明かりを灯してもいい暗さなのに、家に明かりがない。その造りは古めかしく、いかにも物の怪が出そうで、はたして人が住んでいるのだろうか、と吉次は思った。辺りを見渡しても、幽閑としたその様は不気味で、森の中に何か潜んでいるような気がしてくる。

「誰か住んでいるのでしょうか？」

吉次が訊くと、庄助もそんな気がしたのだろう、汗のしたたる顔を曇らせた。

「どうだろう、いないかもしれないな。だが、いないならいないで勝手に使わせてもらうまでだ。夜露に濡れるより余程いい」

今夜の宿は決まった。弥平が茶屋の脇に馬を繋ぎ、荷物を下ろす。

「ごめんよ。誰かいるかい？」

戸口を開け、庄助が中を覗き込む。用心して中に入ると、吉次も戸口に立った。中は薄暗かった。それでも、きちんと整頓されていて埃も積もっておらず、人が暮らしている様子は窺えた。

「誰もいないのかい？」

もう一度大きな声で呼び掛けると、やっと奥から声が返ってきた。

「はい、ただいま」

姿を見せた主人は年老いた小男で、愛想笑いを浮かべていた。

「すみませんでしたね。今日はもう客はないだろうと思い、ついうとうとしておりました」

言い訳をしながら主人が明かりを灯す。辺りが一気に明るくなり、茶屋の中の様子が一段とはっきりした。埃が積もっていないどころか、板敷きも柱も長年使い込まれていて黒光りしていた。厨も立派に整っていて、大勢の旅人がここに足を留めていることが推察される。

「茶を一杯。それと、外はすでに暗くなってきた、泊めてはくれないか？」と、庄助が云う。

「へえ、よろしいですよ。大抵の方は暗くならないうちに峠を越えられますが、お客様たちのように暗くなってからお見えになる方もいらっしゃいます。なにぶん山の中、城下の宿のようなお持てなしは出来ませんが、ゆっくりして行って下さい」

主人が厨へ下りていき、茶の準備を始める。

庄助が土間の隅に荷物を下ろすと、吉次も弥平もそれに倣った。重い荷物から解放され、吉次は伸びをした。庄助に続いて板敷きに上がり込む。弥平が荷物の中から自分たちの分の米を取り出し、主人に渡した。

「すぐにお茶を運びますから上で待っていてください」

そう云われても弥平は遠慮して上へ上がろうとはしなかった。

「お前も上がってきなさい」

庄助に云われて、弥平はやっと板敷きに上がった。それでも吉次たちからは少し離れて座った。

主人がお茶を持ってきた。庄助と吉次が飲み始めると、それを見て弥平もお茶に手を伸ばした。

「申し遅れました。仁念と申します」と、主人が慇懃に頭を垂れる。庄助も自分たちを紹介した。

仁念——普通の茶屋の主人にしては奇異な名前だ。

「大層な荷物で大変だったでしょう？」

「ええ、まあ」と、庄助が曖昧に短く答える。まだ主人の仁念を十分に信用しきってはいないようだ。賊の仲間かもしれないとでも思っているのだろう。吉次も最初は家や辺りの様子から胡乱な人物かもしれないと思ったが、その親しみの持てる顔を見ていると、そんな警戒心は霧散していた。

「間もなく飯は出来ますから」

仁念が下がるのを見届け、庄助が居住まいを正す。吉次も弥平も膝を揃えた。

「ふたりとも今日のご苦労だった。重い荷物でさぞ大変だったろう、それもひとえに多良屋のためだ。多良屋の再建は儂らの肩にかかっているといっても過言ではない。明日からも厳しい旅が続くだろう。今晚はたらふく食って英気を養ってくれ」

短い訓示を終えると、庄助は懐から帳面を取り出し、なにやら記入を始めた。

「何を書いているのです？」

吉次が覗き込もうとすると、庄助は帳面を閉じた。

「その日の売上げや出来事を書いている」

見るんじゃないと目で云われ、吉次は引き下がった。

まだ何も起こっていないのに、何を書くことがあるのだろう。吉次は訝った。おそらく大旦那に云われて、旅の細かなところまで記録しているのだろう。本当に几帳面な男だ。

庄助が一心不乱に書き物をし、その向こうで弥平が薄ぼんやりとお茶を飲んでいる。弥平とそれほど親しくない吉次は気詰まりを感じ、板敷きを下りた。主人の仁念がいる厨へ向かう。

「何か手伝いましょうか？」

吉次の申し出に仁念は慌てて首を振った。

「とんでも御座いません。もうしばらくですから、どうぞお待ちになってください」

行き場を失った吉次は外へ出た。すると、深みを増した闇が迫ってきて、中へ戻ろうとした。幽閑とした静寂が今さらながらに恐ろしく思えた。が、目に映った夜空の星が吉次をその場に押し留めた。山の中なので満天とはいかなかったが、それでも星は綺麗に瞬いていた。瞬く星を眺めているうちに、吉次はお勢の顔を思い浮かべていた。

所帯を持ちたいと決定的な言葉こそ云ってないものの、お勢には自分の好意は伝えてあり、お勢も頷いてくれた。云えばお勢は所帯を持つことに同意してくれるだろう。問題はお勢の父、喜助だった。飯を食いに行けば愛想のいい顔をしてくれるが、その実、何を考えているのか分からない。お勢には婿を取りたいと云っているらしいが、それとて本心かどうか怪しいものだ。お勢から聞くまで婿の話など聞いたことがないし、あの粗末な一膳飯屋に喜助が命をかけるほど思い入れを持っているとも思えなかった。俺が一膳飯屋を継ぐ気がないのを知った上で婿の話をしているのかもしれない。吉次は、喜助が自分を快く思っていないのではないかと思えてきた。断りの方便として婿の話をしているのではないか。器量好しのお勢ならうだつの上がない俺なんかよりも、もっと条件のいい縁組みが望めるだろう——喜助はそう考えているのではないか。

喜助が暗い面持ちで星空を眺めていると、戸口から主人の仁念が顔を出した。

「お待たせしました。食事の用意が出来ました」

仁念に続き、吉次は中へ入った。板敷きでは庄助たちがすでに食事を始めていた。酒も傍らに置いてあった。

「山のものばかりでお口に合いますか……」

椀の中には山菜と野菜を煮たものが入っていた。

「お気遣いなく。充分です」と、庄助が同意を求めるように吉次たちを見渡して云う。吉次も不満はなかった。見た目はよくなかったが、味は旨かった。見渡した庄助の目が笑った。

「酒も用意してもらった。遠慮なく飲んでいいぞ。初日の今日くらいは大旦那も大目に見てくれるだろう。ただし、これから先は儉約に努めなければならない。まあ、上手くいけばまた酒くらいは飲ましてやってもいいが……」

「生憎と肴を用意しておりませんで」

恐縮して云う仁念の言葉を庄助は聞いていなかった。

「見たところ他には誰もおられないようですが、ここにおひとりでお住まいですか？」

「ええ。女房が死んで十年になりますか、それからはずっとひとりです」

「お寂しいでしょう？」

「死なれた頃はそんな思いもありましたが、今では慣れてしまいました。口うるさいのがいなくなって却って清々しているくらいです」

仁念の口の端に自虐の笑みが浮かぶ。合わせるように庄助も笑みを浮かべた。

「うちにも口うるさいのがいますよ。……ところで、儂らはこれから隣国へ行って商売をするのですが、隣国の状況はどうですか？ 商売に向いておりますでしょうか？」

「ここで休まれるお客さんの話を伺っておりますと、この国とさして違いはないようです。平和になっておりますから商売も出来るのではないのでしょうか」

「なるほど。ときにご主人、明日は峠を越えるわけですが、山賊などでないでしょうか？」

主人の仁念が笑いながら首を振る。

「そんな物騒な輩はおりませんよ。山賊の方だって場所を選ぶでしょうから」

「ほう、それはまたどうして？」

「憾み地蔵ですよ。何十年も前から憾み地蔵のお陰で賊のたぐいはいなくなってしまいました」

「憾み地蔵……」と、庄助が興味深げな声を漏らす。

吉次も耳をそばだてた。憾み地蔵——何とも不気味な響きだ。茶屋の周りを見渡したときに感じた、森に漂っているおぞましきの正体はそれだったのかと吉次は思った。

「山道を上った少し先にあるのですが、もともとは道中の安全を守る地蔵だったんです。それがどうして憾み地蔵に変貌したのか、謂われを語りますとその昔、ある男が妻を連れて旅をしておりました。隣国から峠を越えてこちらへ向かっておりました折りに、山賊に襲われてしまいまして、男は身ぐるみ剥がされ、男の妻は連れ去られてしまいました。そのあとを男は追いかけてきましたが、山に慣れた山賊に追いつくことは叶わず、仕方なく峠に引き返してきました。そのとき地蔵を見つけたのです。何でもいいから縋りたかったのでしょう、男は地蔵に山賊を殺してくれと恨み言を云いました。それが罰当たりなことだとは分かっていたのですが、云わずにはいられなかったのです。すると後日、山に登った木こりが狼か何かの獣に食い殺された山賊を見つけました。山賊は見るも無惨な姿に変わり果てており、男の妻の亡骸もありました。同じように獣に食い殺されておりました。男は妻の死に悲観し、自ら命を絶ったということです。人に恨みを抱くということは、それ相応の応報を覚悟しなければならないということでしょう。それ以来、平凡だった地蔵は何かしらの恨みを持つ人を惹きつけてやまなくなりました」

「いい地蔵なんだかどうだか……」と、庄助が半笑いで云う。しかし、その声には微かな怯えが感じられた。

「いいか悪いかは分かりませんが、叶えてくれるのですから靈驗あらたかなのは間違いないでしょう。お陰でこんな山の中なのにお客が絶えなくて、先祖からの役目を務めることが出来ます」

「先祖からの役目とは？」と庄助が訊く。

「地蔵を護ることです。先祖はもともと僧侶でして、わたしに僧籍はありませんが、名前だけはそれらしく名乗らせていただいております。しかし、それもわたしの代で終わりです。子がありませんから」

主人の仁念が寂しそうに笑う。

そういう理由だったのかと、仁念という名前に吉次は納得がいった。

笑みを浮かべていた仁念の顔が強張った。

「でも、お客が来てくれるからといって喜んでばかりもいられません。世の中には恨み言を抱いている人がそれだけ多いということですから」

何だか胡散臭い話だと思いながら仁念の話を訊いていた吉次は、酒をなみなみに注いで一気に飲み干した。元来、信心深くはない。先祖が客寄せのために作った話のような気がする。あるいは仁念自身が昔話を脚色しているのかもしれない。同じ話を何度もしているとみえ、仁念の話しぶりには云い淀みがなかった。

「恨み言が叶うなんて、本当の話だったら恐ろしいことだ」

庄助はまだ半笑いの顔だった。そのくせその声にはさっきよりも怯えの姿があった。

「本当の話ですよ。何ならひとつ恨み言を云ってみてはいかがですか？ きっと叶いますよ。ただし、大きな恨み言はいけません。その分、応報が大きいですから」

「そんな大きな恨み言など誰にも抱いてはおりませんよ」

「そうですね。恨み言など持たない方がいい。持たない方がいいが、持ってしまったらなるべく小さなうちに始末することです。先ほどいたしました旅の男の話ですと、殺してくれは云い過ぎでした。せいぜい懲らしめてくれ程度にしておけば妻を亡くすことはなかったでしょう。懲らしめたところで妻が帰ってきたかどうかは分かりませんが……」

長話をしすぎたとばかりに仁念が立ち上がり、座を辞した。あとに残った吉次たちは黙って食事続けた。しばらくして庄助が隣の吉次にそっと小声で話し掛けた。

「吉次は今の話をどう聞いた？ 本当だと思うか？」

「さあ、どうでしょうか。その旅の男の話は、たんに山賊が狼に襲われて死んだという話に過ぎないのではないのでしょうか。男の妻にしても、山賊と一緒にいたから狼に食い殺されてしまった、ただそれだけのことでしょう」

「偶然に過ぎないと？」

「ただの偶然といってしまうのは畏れ多い気もしますが、全てを地蔵の靈験であるかのように捉えるのはいかがかと……」

吉次の言葉に、庄助は顔をしかめた。もっと肯定的な言葉を聞きたかったのだろう。仁念の話をもほとんど信じているらしい。

「お試しになってはいかがですか？」と、吉次は水を向けた。

「俺がか？」

「ええ。先ほどは恨み言など何もないとおっしゃっていましたが、何かしらあるでしょうか？」

庄助が考え込む。

「まあ、ないこともないが……」

「何です？ それは」

「それは云えない」

誤魔化すように笑い、庄助が酒をあおる。

吉次は一抹の不安を覚えた。庄助の恨み言が自分に向けられるかもしれない――。

次の朝、晴れ渡った空の下、吉次たちは隣国目指して山道を上り始めた。

出掛けに茶屋の仁念が、恨み地蔵のことは本当で御座いますからと念を押したので、庄助の地蔵への信憑性はますます高まったようだった。地蔵のある道の上へと足を急がせる。

山道を上る三人の先に、朝早くだというのに人がいた。百姓姿の女だった。道端に佇み、手を合わせて拝んでいる。あそこに恨み地蔵があるのだろう。近づくと、その女は慌てた様子で顔を伏せたまま、吉次たちにちょこんと頭を下げて通り過ぎていった。人に恨みを抱いているのを知られたくないらしい。

「これが恨み地蔵か……」と、庄助が目の前の地蔵をまじまじと眺めて云った。

地蔵の顔は目、鼻、口の痕跡が残ってはいるもののそれは微かで、判然としなかった。長年、風雨に晒されてきたのが一目で分かる。仁念が云っていたように、よほど昔からあるものに間違いなさそうだ。ただ、禍々しい妖気をのようなものを漂わせているのでは、と考えていた吉次は拍子抜けする思いだった。朝の陽の中に見ているからかもしれないが、恨み地蔵は何の変哲もない、ただの古びた路傍の地蔵にしか見えなかった。

庄助が目を閉じ、手を合わせて拝み始めた。口を小さく動かして何やら呟いている。恨み言だ。誰かに向けた恨み言を地蔵に祈っている。やがて口の動きをやめ、目を開いた庄助に吉次は訊いた。答えてくらないかもしれないが、訊かすにはいられなかった。

「何を願ったのです？」

冗談めかして云うと、庄助は恥ずかしそうな笑みを浮かべた。どうやら自分のことではないようだ、と吉次はひと安心した。

「何をもって……」と云ったあと、庄助は足を止めて黙った。吉次も足を止める。後ろをついてきていた弥平が馬を牽いてふたりの横を通り過ぎていった。弥平には聞かれたくないようだ。

「お染めのことだよ」と、庄助は女房の名前を口にした。

お染めなら吉次も知っている。多良屋の近くにある庄助の家に何度か遊びに行ったことがあり、お染めには歓待してもらった。

「お染めさんに恨み言ですか？」

吉次は意外な気がした。似合いの夫婦かどうかは分からないが、少なくともいがみ合っているようには見えず、恨みを抱いているなどとは想像だにできなかった。他人には伺い知れない部分があるのだろうが、それにしても慮外といわざるを得なかった。

「ああ。吉次も知っているだろう？ お染めの口のうるささを」

「ええ、まあ……」

吉次は小さく笑った。お染めの口のうるささは知っている。お染めはよく喋る女だった。たいがいの女はそうだが、お染めは輪をかけてお喋りだった。城下の通りでは知り合いを見かければ走り寄っていくし、遊びに行った際には吉次も付き合わされた。しかも長い。長い上に愚痴が多い。

「お染めは小言ばかり云う。あれをしてくれない、これをしてくれない、しまいには話を聞いてくれない——。どうでもいい話ばかりで、いい加減うんざりさせられる。疲れて帰った夜など、頭が痛くなってくるんだ。どうしてああも言葉が口を衝いて出てくるんだろうな、不思議でならない。だから、ほんの二、三日でいいからお染めを黙らせてくれないかと祈ったんだ。それくらいだったら応報もたいしたことがないだろう。自分の身に何が起こるか分からないからな、ほどほどにしておかないと」

庄助は仁念の言いつけを守った。本当はもっと長い間喋れなくなって欲しかったのだろうが、やはり相応の応報が怖いようだ。もし願いが叶ったとして、庄助の身には何が起きるのだろう。

「お染めには内緒だぞ」

にやりと笑い、庄助が再び山道を歩き始める。

吉次は恨み地蔵を見やりながら庄助に続いた。地蔵に何となく惹かれるものがあった。いつ何時、人に恨みを抱くかもしれず、そのときはきつとここへ来るだろう、と思った。御利益があるかどうかは別にして、この地蔵に胸の内を打ち明ければ、邪心は多少なりとも薄れるかもしれない。吉次の脳裏をお勢の父、喜助の姿がよぎった。頭を振り、吉次はそんな嫌な考えを追い出した。

やはり金物を担いで峠越えはきつかった。ひとつひとつは小さくて軽いが、束になれば鉄の塊を担いでいるのと変わらない。徐々に山道は急坂になり、茶屋を出てまだ半時も経っていないのに、皆の息はぜいぜいと上がっていた。馬も同じで、首を上下に大きく振っている。弥平が上手く操らなければ、その場に立ち止まって動こうとしなかったかもしれない。峠を越えるのに何度も休み、そうして山道がやっと下りになると、山裾に広がる隣国の景色が見えてきて、吉次たちは疲れ切った溜め息を漏らした。文字通り、峠は越えた——そんな心境だった。あとは下るだけで、足が自然と前が出る。

麓の村に着いた吉次たちは、少しだけ休むと勇んで商売を始めた。一軒一軒回って鎌や包丁を見せる。熱心に訴えたが、そうそう上手くはいかなかった。隣国から来たというだけで警戒され、話を聞いてくれないことも多かった。平和になったとはいえ、戦が盛んな頃には隣国同士で何度も合戦が行われただけに、根深い感情があるようだ。中には鍬を振り上げて追い返す者もいた。

何も売れないまま一日が過ぎ、さらには運の悪いことに、平坦な道を歩いていただけなのに庄助が何かに躓いたかのように転んでしまった。咄嗟に手を出したものの、両膝を地面に打ち、あまりの痛さに庄助が顔を歪める。

「大丈夫ですか？」と吉次は声を掛けた。

「ああ、大丈夫だ。こんな真っ平らな道で転ぶなんて、俺も歳かな」

庄助が笑ってみせる。庄助は吉次よりも七つ上で、まだ四十にもなっていない。

「歳というにはまだ早いでしょう」

「そうだな」と云い、自分でも納得しかねるのか、庄助が転んだ辺りの地面を凝視する。吉次も見た。が、出っ張りも石も、人を蹴躓かせるようなものは何もない。

「歩き通して足が疲れているのですよ」

吉次の慰めに、庄助は頷いたが、釈然としていないようだった。一番の年上である弥平は五十がらみだが、その弥平でも疲れてはいるものの、足取りはまだしっかりしていた。

躰についた土埃を払いながら、庄助は立ち上がった。数歩だけ足を踏み出したところで、庄助はまたしても無痛に顔を歪めた。

「駄目だ。痛くて歩けない」と云い、膝を伸ばして地べたに尻をついた。背中の荷物を下ろし、痛む膝をさすっている。生真面目な庄助が弱音を吐くくらいだから、その痛さは吉次にも察してあまりあった。

すでに陽が翳ってきている。この場で休むより、今日の宿を探した方がよさそうだと吉次は思った。先を見やると、お寺がある。庄助の様子ではとても歩けそうな距離ではなかった。吉次は馬の荷物を弥平に下ろさせると、ふたりがかりで庄助を馬に乗せた。庄助たちが先にお寺へ行き、宿泊の交渉を済ませる間、吉次は荷物の番をした。やがて、庄助を寺に下ろし、空の馬を牽いて弥平が戻ってきた。下ろしてあった荷物を馬に乗せ、ふたりはお寺へ歩き出した。

「あの痛がりようからすると、相当酷いのではないのでしょうか？」と弥平が訊いた。

「転んだだけだから一日寝れば大丈夫だとは思いますが、どうだろうな。まだ何も売っていないのに、これでは先が思いやられる」

「そのことでございますが……」と、弥平が暗い声で云う。

弥平が先のことを気にかけていたとは、吉次は意外だった。

「何だ？」

「もしもですよ、もしも庄助さんの足の具合がよくならなかったときはどうなるのです？」

「どうなるも何も……ふたりでやるしかないだろう」

「やはりそうなりますか」

弥平が落胆の声で云う。心配していたのは自分の仕事が増えることだったようだ。

「しかしな、転んだだけだぞ。血も流れてはいなかった。明日には歩けるようになっている」

「ですが、腫れておりました。しかも、寺に着いたときには二倍ほどに」

「二倍に？」

「へい。赤黒くて、まるで熟した巨大な柿がふたつくっついているようでした」

弥平が大袈裟に云っているのだと吉次は思った。しかし、寺に着き、僧房で足を投げ出して座っている庄助の膝を見ると、弥平の言葉は誇張ではなかった。庄助の膝は、二倍は優に腫れていた。寺の僧侶が施してくれたのだろう、腫れた膝には薬草が塗ってあった。

「この短い間にこれほど腫れ上がるとは……」

驚いて云う吉次に、庄助は痛みを堪えて笑顔を返した。こんなときにも手に帳面を持っている

。

「薬草に詳しいお坊さんがいてくれて助かった。心配をかけたが、こうして薬草を塗ってもらったからもう大丈夫だろう」

次の朝には腫れはひいているだろうと寺の僧侶も吉次たちも思ったが、儂くもその期待は裏切られた。翌朝吉次が目を覚ますと、庄助はすでに起きていた。冴えないその顔から、膝の状態がよくないのは察せられたが、痛みだけでも治まっているかもしれないと思い、吉次は訊いてみた。

「具合はどうです？」

情けなさそうな顔をして庄助が首を振る。

「ちょっと立ってみたんだが、駄目だった」

庄助が、このざまだ、と膝を見せる。それは昨日と何ら変わらず、不気味に腫れたままで、とても人の足には見えなかった。熟した柿が臭ってきそうだった。

「無理をしないでください。俺と弥平で今日は何とかしますから、庄助さんは今日一日、ゆっくり休んでいればいいですよ」

「すまないな」

悄然として庄助が云う。頭分である自分が何も出来ないことに苛立ってもいるようだった。

いつの間にか弥平も起きていた。弥平は庄助の膝を見ても何も云わなかった。杞憂したとおりになってやる方ないのだろう。吉次は弥平の溜め息が聞こえた気がした。

朝飯が終わり、吉次は弥平とともに寺の近くの家々を巡った。朝早くのうちはどこもかしこも相手にしてくれなかったが、午後になると話を聞いてくれるところも出てきて、ひとつふたつと売れるようになった。少しは先に希望が持て、この調子ならひと月とかかからずに荷物をさばけるかもしれない、と吉次は思った。庄助の膝の具合がよくなればもっと早まるかもしれない。そうになればお勢に会える日も近くなる――。

ところが庄助の膝はいつこうによくなる兆しがなかった。

寺に戻った吉次は庄助の膝を見て愕然となった。腫れはそのままだったが、色が一段と黒くなっていた。いつになったら治るのだろう。これは本当に治るのだろうか――。

「少しは売れたか？」と、手に帳面を持って庄助が訊いた。

その日の売れ具合を短く云い、吉次は薬草を作ってくれた僧侶の元へと急いだ。庄助の膝がいつ頃には治そうなのか、確かめずにはいられなかった。

僧侶は眉根を寄せて首を振った。

「治療は間違っていないはずですが、どういうわけかよくなりません。もう少し時間をかければ薬草も効いてくると思いますので、ゆっくり養生なさったではいかがですか。こちらとしましては、具合がよくなるまでいてくださっても構いません」

明日から弥平とふたりでの売り歩きが決まった。それはいつ終わるとも分からない。庄助の膝がひと月治らなければ、ずっとふたりで仕事をこなさなければならない――。

「大旦那様に云って代わりの者をよこしてもらってはいかがですか？」

僧坊に戻り、吉次は庄助に云った。

「それは駄目だ。こんなことで大旦那様にご迷惑をかけられない。すまんが当分ふたりでやってくれないか。明日、いや、明後日には動けるようになると思う」

その晩の飯は味がしなかった。すまないと何度も頭を下げる庄助に文句のひとつも云ってやりたかったが、庄助が悪いわけではないので吉次はただ黙っているしかなかった。

次の日、吉次たちは重い気持ちで村々を回った。ぽつりぽつりと売れるには売れたが、荷物が軽くなったと実感できるほどには売れなかった。軽くない荷物に苛々が募り、吉次は思わず弥平相手に愚痴を吐いた。

「庄助さんの膝は仕方がない。薬草を塗ってもよくなるんだからな。仕方がないが、だからといってふたりだけでやることはないだろう。代わりの者をよこしてもらえばいいのに、大旦那が怖くて云い出せないんだ、まったく……。大旦那も大旦那だ。どだい三人でなんて無理だったんだよ。今日もいくつ売れた？ 微々たるものだ。貧乏人ばかりのこの辺りで売れるわけがない。販路を拡げると云っても買ってくれそうなところへ行かなければ意味はないんだよ」

親とも思っている大旦那だったが、思わず熱くなり、吉次は自分でも云いすぎたと思った。実際、吉次は云いすぎた。後にこのことが吉次に舌禍として降りかかる。

僧房ではいつものように、不気味な膝を投げ出した庄助が、手に帳面を持って吉次たちを待っていた。この二日で近くの村はあらかた廻り尽くし、吉次はそのことを庄助に云った。

「ここにいても仕方がないので、俺と弥平は先へ急いだ方がいいかと思えます」

「そうだな。ひとり残るのは寂しいが、その方がいいだろう。儂は当分動けそうにない」

庄助が涙を流さんばかりに悔しそうな顔をする。責任感が強いだけに、役立たずの今の自分が赦せないらしい。

誰もが口々に、あと四、五日も寝ていればよくなるから、と庄助を励ましたが、内心では、悪ければこのまま庄助の膝は元に戻らないかもしれない、と思っていた。吉次は別のことを考えていた。このたびが上手くいかなかったなら、そのときは全てを庄助の膝のせいにするばいい――。

ところが、庄助の膝のせいにする大旦那への言い訳は通用しなくなった。寺に来て三度目の朝、吉次は庄助のはしゃいだ声で起こされた。

「吉次、起きろ。これを見てくれ」

吉次が目を覚ますと、顔の先に庄助の膝があった。

「これはどうしたことです？」

吉次は目を見張った。あれほど不気味に腫れていた庄助の膝が一晩で元に戻っている。

「驚いたろう。儂も驚いた。このとおり、痛みもない」

膝頭をポンと叩き、そして庄助は飛び跳ねて見せた。この騒ぎに弥平も起き出した。

「弥平も見ろ。やっと薬草が効いたようだ。儂の膝は治った」

庄助の頬を涙が伝う。痛みと重圧からの解放で、その泣き顔は晴れやかだった。

お礼を云いに、喜び勇んで庄助は僧侶たちの元へ駆けていった。

残された吉次と弥平は顔を見合わせた。お互いの思うところは同じに違いなかった。

これからは少し楽になりそうだ――。

久しぶりに動く膝がよほど嬉しいとみえ、庄助は跳ねるように歩いた。休んでいた日の遅れを取り戻そうと必死に村々を廻った。その甲斐があって、日ごとに売上げは伸びた。二十日ほどで各々が背負っていた荷物はさばけた。しかし、それが限界だった。馬の背に乗っている荷物はさばけないままひと月が経ってしまった。

「このままでは帰れないが、仕方がないな」

無念の面持ちで庄助が云う。路銀が尽きかけており、三人は大旦那に叱られるのを覚悟でやむなく城下へと引き返した。

峠にさしかかり、吉次はふと思った。

庄助の膝が腫れ上がったのは、恨み地蔵の応報ではないのか。そのことを庄助に話そうかと思ったがやめた。庄助は心ここにあらずだった。城下が近づき、地蔵のことなど頭にならなかった。頭の中は大旦那へのお詫びでいっぱいなのだろう。

地蔵の前を通り過ぎ、茶屋の仁念に顔を見せる。だが、急げば陽のあるうちに城下へ着けそうだったので、茶も飲まずに吉次たちは山道を下りていった。

庄助と吉次を座敷で迎えた大旦那は、落胆こそすれ叱りはしなかった。長旅ご苦労さん、とねぎらいの声を掛けてくれたほどで、ほっと胸を撫で下ろして吉次が座敷を下がると、番頭が怖い顔でやってきた。吉次をひと睨みして大旦那と庄助のいる座敷に入っていく。胸騒ぎを覚え、吉次はその場で立ち止まった。すると中から庄助を叱りつける番頭の怒声が響いてきた。頭分の責任として叱られているのだろう。

「ひと月も何をやっていたんだ！ 半分しか売れないなんて考えられない。おおかた物見遊山の気分だったのだろう！ 違うか！」

「物見遊山などとんでもありません。一生懸命努めたのですが売れなかったのです。本当に申し訳ありません」

畳に額をこすりつけて謝っている庄助の姿が思い浮かび、吉次は気の毒になってきた。失敗したなら庄助の膝のせいにすればいいとさえ思っていた吉次だったが、さすがに湧き上がる心痛を抑えることは出来なかった。

番頭の庄助をなじる言葉は続いた。番頭の声が途切れると、今度は大旦那の声がした。

「お前に期待をかけた儂が間違っていたのかもしれないな。こんなことでは早晩、多良屋は立ち行かなくなるぞ。分かっているのか。来月、また行ってもらう。それが最後だと思え」

ふたりがかりでの庄助へのいたぶりはしばらく続きそうだった。居たたまれなくなり、吉次はその場を離れ、使用人たちの部屋へ戻った。

疲れていた吉次はごろりと横になり、天井を見上げた。辺りはすでに暗く、闇の中に大旦那の怒りに満ちた顔が浮かぶ。激しく怒声を浴びせる番頭の顔が浮かぶ。そしてひたすら身を縮めている庄助の姿が浮かんだ。

大旦那は滅多なことでは怒られない。吉次も奉公にあがって十数年経つが、大旦那の怒った顔を見たことは数えるほどである。それほど多良屋は切羽詰まった状況に置かれているということだろう。それにしても威張り腐る番頭には腹が立つ。庄助のためにも、恨み地蔵に願い出て懲らしめてやろうか。本当にあの地蔵は恨み言を叶えてくれるのだろうか。そんなことを考えているうちに吉次は眠りに落ちた。

腹が減って目を覚ました吉次は、お勢のところへ向かった。ちょうど客足も落ち着いてきていい頃合いだった。ひと月ぶりである。ほとんど毎日会っていただけに、久しぶりの再会に心が逸った。見送ってくれた際の嫌な思いはすっかり消え去っていた。

そっと飯屋の中を覗いてみる。お勢の横顔がすぐに目に入り、吉次の頬は緩んだ。驚かせてやろうと足を踏み入れようとした吉次だったが、吉次はその足を止めた。お勢が客の浪人者と話をしている。注文にしてはおかしい。なかなか下がろうとしない。それどころか、客が少ないのをいいことに、内密の話をしているようだった。吉次は浪人者に目をやった。見覚えはない。ただの客に過ぎないのだろうが、やけに親しそうだ。

「そんなところに突っ立てないで、中に入ったらどうだ」

店の奥から喜助が呼び掛ける。その声にお勢も戸口に顔を向けた。

「ああ、吉次さん。やっと帰ってきたわね。それでお仕事はどうだった？ 上手くいった？」

「まあまあだ」

吉次はお勢に気のない返事しか出来なかった。何だか心の内が鬱屈している。お勢の顔を見て嬉しい気持ちに違いはないのだが、あの浪人者が気にかかる。

「何よ、久しぶりだっていうのに、そんな云い方をしなくてもいいじゃない」

「そんなことより飯だ。腹が減っているんだ」と、つつい突っ慳貪な物言いになる。

「何かあったの？ 変よ」

「何でもない。いいから早くしてくれよ」

「変な人……」

合点のいかない面持ちでお勢が厨へと引っ込む。

吉次は浪人者の反対側に座り、胸の内でお勢にぞんざいな自分の態度を詫びた。しかし、それを言葉にすることは出来なかった。吉次の目の端に浪人者の姿が映っている。やおら顔を動かし、吉次は睨むように、その浪人者を凝視した。よく見ると目元の涼やかないい男である。元はきちんとした身分だったと思えるような身なりをしている。吉次が尚も見ていると、その視線に気づいたのか、浪人者が吉次の方に顔を向けた。慌てて吉次は顔を逸らした。浪人者が近づいてくる。怒ったのだろうか、吉次は躰が硬くなった。腰に立派な刀を差している。

「ご馳走様。また寄らせてもらうよ」

「いつもありがとうございます」

厨にいたお勢が慌てて駆け寄った。浪人者を追いかけ、外まで見送ってその後ろ姿に頭を下げている。振り返ったお勢の顔が嬉しさを噛みしめているように、吉次には見えた。

浪人者は常連のようだ。吉次に見覚えはないから、このひと月のうちに通うようになったのだろう。浪人者とはいえ、出自の立派そうな男がわざわざここに足を運んでいる――。

戻ってきたお勢は何も云わずに吉次の横を通り過ぎた。もうちょっと待ってねとか、何かしらの言葉をかけてくれてもよさそうなのに何も無い。客は吉次の他にふたりだけ。すでに食事は終わりにかけていて、これから作るのは吉次の分しかないはずだ。それなのに、お勢はなかなか持ってこない。吉次の苛々は募った。喜助が意地悪をして、わざと遅くしているのではないか——。そんな疑念が湧いてきた頃、お勢が膳を運んできた。

「お待たせ」

お勢から膳を受け取ると、吉次は黙々と食べ始めた。やはり喜助の飯は旨いと思う。

「今日の吉次さん、何だか変よ」

そう云ってお勢は厨へ引き返していった。

変？ 確かに変だ。自分でも分かっている。あの浪人者に嫉妬している。ただの客に過ぎないだろうに、気を回しすぎている。吉次は己をみっともないと思った。が、抑えることが出来なかった。食事を噛みしめるにつれ、浪人者に向けられた嫉妬は増大し、あの浪人ものの正体を確かめずにはいられなくなった。

先にいたふたりが帰ると、吉次も勘定を置いて立ち上がった。やってきたお勢に話があると告げ、そのままお勢を店の外に連れ出した。お堀端を歩く。

「話して何？」と、お勢が不安そうな面持ちで訊く。

「さっきの浪人者は誰だ？」

努めて穏やかな口調で話を始めたかったが、苛立ちが口に出てしまった。

「ああ、藤十郎様ね。佐倉藤十郎様。佐倉様がどうかしたの？」

「どういったお方なんだ？」

「どういったって……ただのお客さんじゃない」

「前は見かけなかったが、いつ頃から来ているんだ？」

「二十日ほど前からよ。吉次さんたちが旅に出て少し経った頃から。ねえ、どうしてそんなことを訊くの？ 藤十郎様が何かしたの？」

云ってしまうと自分の嫉妬が知られてしまう。お勢に、度量の小さな男だと思われてしまうかもしれない。吉次は躊躇した。しかし、やはり気になって仕方がなかった。

「ずいぶん親しそうじゃないか」

「当たり前じゃないの。大切なお客様よ。ほとんど毎日来てくれるわ。佐倉様が何だって云うのよ？ 何が云いたいの？」

「独り者のようだが、本当にただの客か？」

とうとう云ってしまった。吉次の胸中に後悔と羞恥が渦巻く。

「そうよ。決まってるじゃない。ははあ……独り者を気にしているところをみると、さてはわたしと佐倉様のことを邪推しているのね」

「思いたくもなるだろう。ひと月ぶりに帰ってきたら知らない男と親しげに話をしていたんだ。しかも、相手は男っぷりのいい侍だ、そんじょそこらの男とはわけが違う」

「意外と焼き餅焼きなのね」と、お勢が茶化して云う。

「まあ、何でもないならいいんだが……」

吉次は笑って見せた。それでも吉次の心は晴れなかった。お勢はたんに客のひとりと思っているようだが、浪人者の方はそうではないかもしれない――。

「それにしても二十日も通い続けるなんて、どういう了見なんだろうな？」

それとなくお勢に水を向ける。その顔色に変化がないか、じっと凝視する。

「こんなに長くいるとは思っていなかったんじゃないかな。仕官の口を探して城下の親族を頼ってきたらしいけど、なかなか上手くいかないそうなの。それでするずると二十日も親族の家で厄介になっているんだって」

お勢の態度に何かを誤魔化す様子は窺えなかった。少なくとも、お勢にその気はないようだ。

「その親族もいい迷惑だな。二十日もいられたんじゃない宿賃でももらいたくなるだろう」

「それじゃ親族を頼った意味がないじゃない」

「その割には一膳飯屋とはいえ、外で食べている。まさか飯を出してもらえないわけでもないだろうに……」

「そういえばそうね。でも、その分うちが儲かっていいじゃない」

「そういう問題じゃない」

吉次は顔をしかめ、宙を睨んだ。やはり藤十郎という浪人者がお勢にのぼせ上がっているのは間違いないだろう。嫉妬の炎が勢いを増す。

「何よ、怖い顔をして」

「その藤十郎とかいう奴は来なくてもいい飯屋に来ているということだ。それに、仮に親族が飯を出してくれないとしても、あの身なりからしてもっと上等なところで飯は食えるはずだ。何もこんなむさくるしいところで食わなくてもな」

「むさくるしいって言い方はないんじゃない」

お勢は笑みを浮かべていたが、声には怒気が含まれていた。

「お勢に惚れてやがるな」

吉次は冗談めかして云った。しかし、胸中の嫉妬の炎は赤々と燃え、それは憎悪へと変わった。

「何を言い出すの、いい加減にして。そんなこと……あるわけじゃないの」

お勢が顔を赤らめる。それを見て吉次は、お勢も満更ではないな、と思った。藤十郎は浪人とはいえ、家柄のよさそうな、目元の涼しいきりりとした侍である。好かれて悪い気はしないだろう。移り気がしたとしてもおかしくない。すでにそうなっているのかも――

「いや、きっとそうだ。おめえもまさか……」

疑う目で吉次が云うと、お勢はお勢の怒りは頂点に達したようだ。

「馬鹿なことを云わないで」

怒声を発して哀しい目で吉次を睨みつけ、お勢は飯屋へと駆けていった。

お堀端を渡る風がやけに冷たく感じられた。

云いすぎたか、と吉次は己を省みたが、疑念は晴れない。お勢が藤十郎に好意を抱いていないにしても、藤十郎がその気なのは間違いない。でなければ、いくら旨いからといってあんな一膳飯屋にわざわざ通うはずがない。常連客の大半はお勢が目当てで通っている。吉次はその中の勝者だった。それも束の間、旅に行っている間に新たな敵が現れた。今度の敵は今までの比較にならないほど強大だ。不遇のうちに身をやつしていても侍である。身なりからして、おそらく名のある主家に仕えていたのだろう。藤十郎の仕官が上手くいき、城下に住むようになったら――と考えると、吉次の心は焦った。

城下に帰り着いた翌日、多良屋の廊下で庄助と顔を合わせた吉次は、周りに人がいないのを確かめ、声を掛けた。

「昨日はさんざんお叱りを受けられたようで、お気の毒さまでした。わたしにも責任のいったんはありますのに、おひとりだけ責められて申し訳なく思います」

「ああ、確かに叱られた。番頭はいつものことだから右から左へ聞き流せたが、さすがに大旦那様のお叱りには肝を冷やした。座敷を下がっても震えが止まらなかった」

吉次は眉をひそめた。

「それで……来月も旅に出るようなことを聞きましたが、本当でしょうか？」

夕べ、ずっとこのことを考えていた。藤十郎が現れた今、また旅に出たら取り返しのつかないことになるかもしれない。

「よく知ってるな。今度は違う方面だ。それでしくじったらいよいよ儂はお払い箱だろうな」

「わたしも同行するのでしょうか？」

「人選はまだだが、また弥平との三人旅になるだろうな」

それが順当だろう。吉次が次の旅で外される理由はない。しかし、吉次は行きたくなかった。藤十郎のこともあったが、重い荷物を担いでの旅は二度としたくなかった。それが顔に出た。

「行きたくないようだな」と、庄助が云う。

「出来れば今度は他の者に……」

「まあ、そうだろうな。儂も行きたくはない。膝があんなことに……そうだ、膝で思い出した」

庄助の目が輝いた。吉次に顔を近づけ、声を落とした。

「峠の恨み地蔵を覚えているか？」

「ええ、覚えております。茶屋を上った先にある地蔵ですね」

嬉しそうに庄助が顔を綻ばせる。

「あれは本物だったぞ。儂の膝が悪くなったのは、恨み言の応報だったんだ。あの地蔵は本当に恨み言を叶えてくれたんだよ」

「ということは……」

「お染めも声が出なくなっていたんだ。もっとも、残念なことに儂はその場にいなかったがな。儂が膝を悪くしていたときと同じだったんだ、お染めの声が出なくなったのは。昨日家に帰ると、儂はお染めに何か変化がないかと心待ちにした。そのときはまだすでに恨み言が叶っているとは知らなかったからな。ところがお染めは相変わらずお喋りで、いつまで待っても何も起こらない。仁念の話はでたらめだったんだと思っていると、お染めが思い出したように話を始めたんだ。儂は膝が腫れたが、お染めは喉が腫れたらしい。息をするのも苦しいほどに腫れ上がり、死ぬかもしれないと思ったそうだ。それが三日間続き、四日目の朝には何事もなかったかのように治っていた。恨み言は叶っていたんだよ。そして儂は応報を受けた。あの地蔵は本物だよ」

「本当にそんなことが……仁念の話は本当だったんですね」

吉次の背中を冷たいものが走る。

「ああ。惜しむらくは、その場にいなかったことだ。せっかく願いが叶ったというのに、静かにしているお勢を見ることが出来なかった。それもこれも、こうしてふたりとも無事だから云えることだが、もしお染めの死を願っていたら、お染めは死んでいただろう。その代わり儂も死んでいただろうな。あの地蔵は恐ろしい。それだけの覚悟があれば簡単に人を殺められるんだからな」

庄助の話をしているうちに、吉次の頭の中には藤十郎の顔が浮かんでいた。庄助が妻のお染めにやったように、心の中に満ちている憎悪を藤十郎にぶつけてやりたい。ぶつけて憂さを晴らしたい。恨み地蔵の霊験を頼れば、それは容易いことなのかもしれない。

吉次は恨み地蔵に何と願うか、それだけを考えるようになり、仕事が手につかなかった。そして休みをもらうことが出来た日、吉次は峠への短い旅を躊躇しなかった。お勢の飯屋に行くと、たいてい藤十郎が先に顔を覗かせており、吉次は気が気でなかった。早く何とかしないと藤十郎の仕官が叶ってしまい、お勢の気持ちが変わるかもしれない――。

吉次は一目散に峠を目指した。前は重い荷物を持っての旅だったので、茶屋に着いたのは陽も暮れかかる頃だったが、今回は何も持っておらず、まだ陽の高いうちに着くことが出来た。それでも駆けるようにしてきたので吉次は疲れ切っていた。茶屋の仁念が手に薪を抱え、山道を上ってくる吉次をぼんやりと見ていた。

「おや、あなたでしたか。それほど日が経っていないのにまたお越しとは、お忙しいことで結構ですね」

隣国へ仕事で行くと思っているのだろう、仁念が微笑んで云う。

「茶をもらえますか……」

仁念と話をするより先に、吉次は喉の渴きを潤わせたかった。

中へ入り、茶を啜る。

「いやあ、腹に茶が浸みていく」

生き返った心地がして、吉次は感嘆の声を漏らした。

「お腹がお空きでしたら飯の用意もいたしますが……」

そそくさと厨へ向かおうとする仁念を、吉次は手で制した。

「飯は結構です。ゆっくりしている時間はありませんから」

「ああ、陽のあるうちに峠を越えなさるのですね。大丈夫ですよ、充分間に合います」

「いえいえ、峠を越えるのではありません。逆ですよ。これから城下へ引き返します。着く頃には夜中になっているでしょうが、明日の朝には店に出なければなりませんので」

「それはまあ、何とも強行軍なことと……」と、仁念が呆れたような顔をした。

「致し方ありません」

吉次は苦笑いを浮かべて云った。朝から夜中まで歩きどおすことになり、自分でも無茶な行動をしていると思っている。それを衝き動かしているものが吉次の胸中に潜んでいた。

「何かわたしにご用でも？ 先日の折、何か失礼をしましたでしょうか？」

仁念が訝しげに訊く。

「いや、そうではありません。どうか気になさらないでください」

「それでは何故……」と云いかけた仁念の目が光った。

「地藏ですね？」

認めたくはなかったが、ここへ来た理由が他に思いつかず、吉次は認めざるを得なかった。

「ちょっとした恨み言を持ちましてね、それで訪ねることにしたんです」

「やはり地藏でしたか」

自分の不始末ではないと分かり、仁念が安堵の声を漏らす。

「しかし、恨み言はほどほどに。相応の応報が降りかかります」

そのためだけにこんな山の中までやってきた吉次の執念から、仁念は吉次の恨み言が尋常ではないと推察したようだ。顔を曇らせている。

「なあに、たいしたことじゃありません。ご心配には及びませんから」

そう云うと、吉次はすっと立ち上がった。

「お茶の一杯で申し訳ありませんが、先を急ぎますので」

頭を下げ、吉次は表に出た。山道を地蔵目指して歩き始める。もう後には引けなかった。

翌朝、目を覚ました吉次は、つま先から腿にかけて、足全体が痛くてなかなか立ち上がれなかった。おまけに寝不足で、朝の光が目痛い。夕べは夜中までには帰り着くことが出来たが、足が痛くて寝付けず、痛みは朝になっても治まっていなかった。却って酷くなっているようだ。地蔵への恨み言の代償がこの足の痛みであったならどんなにいいだろう、と吉次は思った。これくらいの痛みなら我慢できる。しかしこの痛みはただ歩きすぎたからに他ならない。もし恨み言の代償だとしたら、藤十郎が引き合わないと文句を云いたくなるだろう。これからどんな応報が降りかかるのか、吉次は恐れを抱いた。

いつもと同じように掃除やら荷物運びやらで、一日はあっという間に過ぎた。眠気と足の痛みで仕事が疎かになり、番頭に小言を浴びせられたが、庄助を真似て右から左に聞き流した。やっと仕事の時間が終わり、あまり外を出歩きたくはなかったが、吉次はお勢の飯屋へ行った。飯を食うためとお勢の顔を見るため、いつもならそれで充分だったが、今日の吉次はお勢に訊きたいことがあった。

「あの藤十郎という浪人者はまだ来ているのか？」

「ええ、いらしてるわよ。どうして？」

「いや、別に……」

次の日も同じことを訊いた。だが、藤十郎はまだ一膳飯屋に顔を出していた。不審の顔で追求するお勢を、吉次は何とか取り繕った。

そしてその次の日に、吉次は聞きたかった言葉をお勢から聞くことが出来た。

吉次がいつものように仕事はけたあとお勢の店に行くと、お勢は寂しそうな哀しそうな顔をしていた。

「どうした、湿っぽい顔をして。具合でも悪いのか？」

「わたしじゃないの、藤十郎様なの。長い間待たされたあげく、仕官は叶わなかったんですって。すっかり悄気ておられたわ」

お勢が我がことのように、沈痛に話をする。

恨み地蔵の靈験だ！ 吉次は胸中で快哉を叫んだ。藤十郎の仕官が叶わないことこそ吉次が恨み地蔵に願ったことだった。仕官が叶わなければ藤十郎は城下からいなくなる。

「そうか。そりゃあ、残念だったな」

吉次は澄ました声で云った。少しばかり心が痛んだが、気にしてはいられなかった。どちらかが幸せになれば、どちらかが不幸せになる。

「このところ藤十郎様のことを訊いていたけど、ひょっとして仕官のこと？」

「いや、そうじゃないが……」

「だったら何なの？ どうして嬉しそうな顔をしているの？」

自分を抑えたつもりだったが、顔に出てしまったようだ。吉次は狼狽えた。ここは逃げの一手だと思い、急いで残りの飯を掻き込んで表に出た。が、お勢は逃がしてくれなかった。

「何故逃げるの？ 何か疚しいことがあるのね？ 藤十郎様にいったい何をしたの？」

「何もしちゃいない」

「おかしいわ。何かしたに決まっている。藤十郎様が仕官できないように何かしたんでしょ？」

「一介の商人に過ぎない俺にそんなことが出来るわけがないだろう。あの浪人者が仕官できなかったのは技量が足らなかったからだ。それだけのことだ」

恨み地蔵のことを云うわけにはいかず、吉次は必死に抗弁した。しかし、お勢は聞き入れない。

「でも嬉しがってる。藤十郎様の仕官が叶わなくなって喜んでる」

「そんなことはない。俺だってこの常連客には幸せになって欲しいと願っているんだ」

「嘘おっしやい。顔に書いてあるわ。吉次さんは藤十郎様に幸せになって欲しいなんて思っていないでしょ？ 寧ろ、不幸になって欲しいと願ってるでしょ？ わたしには分かるわ。こんなにも心の狭いひとだとは思わなかった。見損なったわ」

「違うんだ……」

お勢は吉次を無視し、踵を返して飯屋へ戻っていった。

初めて見るお勢の心からの怒りに、吉次は打ちひしがれた。これでお勢との仲は終わりかもしれないと思えるほどの衝撃だった。だが、吉次にはまだ余裕があった。

なかに、お勢の腹立ちは一時の気の迷いだ。この国での仕官が叶わなければ、藤十郎が城下にいる意味はなくなる。他国に仕官を求めざるを得ず、やがて城下を離れるだろう。そうなれば、いくら藤十郎がお勢に気があっても、その想いが成就することはない。遠く離れてしまえば男と女は終わってしまうものだ。ましてや、父の喜助が許さないだろう。たとえ藤十郎が他国で仕官が叶ったとしても、遠く離れた地にお勢を嫁に出すとは思えない。婿を取りたいと考えているほどだから、手元に置いておきたいはずだ。それに第一、仕官云々の前に身分の差がある。藤十郎が望んでも、一族が一膳飯屋の娘との婚儀を認めるはずがないだろう。これで完全に藤十郎からお勢を遠ざけることが出来たと思い、吉次はほくそ笑んだ。

しかし、恐れもあった。まだ応報らしきものに出会っていない。足の痛みがそうならよかったが、そんなわけがない。もっと酷いもの、相応のものが身に降りかかるはずだ。

何が起きるのか——不安の面持ちで吉次が多良屋の使用人部屋に戻ると、大旦那様がお呼びだと番頭が云いに来た。番頭は意地の悪い笑みを浮かべていた。予感めいたものが胸を衝く。大旦那の話は藤十郎の応報かもしれない。重い足取りで吉次は廊下を歩いた。何を云われるのか——よくないことは確かだ。それが何かを考えながら歩いていると、大旦那の待っている座敷まではあつという間だった。吉次は覚悟を決め、襖を開けた。

「お呼びで御座いますか」

目の先に大旦那がでんと座っていた。いつもの柔和な顔が見える。しかし、その心の内は分からない。それでもおおよその予想はついた。

「ああ、ご苦労様。吉次は多良屋に来て何年になる？」

「十二、三年になりますか……」

「そうか。そんなに長い間働いてくれたか」

柔和だった大旦那の顔に憂いが差した。

これで終わりと云われているようだ。

「決して長くはありません。これからもずっと働くつもりです。働かせてください。どうかこのまま多良屋においてください」

頭を下げて懇願する吉次に、大旦那は冷たく云い放った。

「お前を置いておくわけにはいかなかった」

吉次の予想は当たった。

「そうおっしゃらずに置いてください。何でもいたします。荷物を担いで諸国を廻れとおっしゃるのでしたら、そのとおりにいたします。ですから多良屋に置いてください」

しまいには涙声になって吉次は訴えた。

「先日の旅の失敗は庄助さんのせいです。庄助さんの膝が突然腫れ上がり、やむなくわたしと弥平のふたりで仕事をしなければなりませんでした。ですから詰め腹を切るのは、頭分でもあった庄助さんが筋なのでは？」

「筋はそうだ。しかし、どちらが店にとって有益であるかを考えると答えは自ずと決まってくる。番頭の話では、最近のお前は仕事に身が入っていないそうだな。上の空で人の話を聞いたり、夜中に帰ってきて次の日の仕事を疎かにしたりで、女にうつつを抜かしているそうじゃないか」「誤解です。女にうつつなど抜かしておりません」

大旦那は大きな溜め息を吐いた。目を細くし、心底呆れ果てたといった態で吉次を見ている。軽蔑、失望、憤懣——そういったものが目の奥で鈍く光っている。

「もういい。お前の本心は分かっている。お前は儂の方策に不服なのだろう？ 販路の拡大など上手くないかと思っていたのだろうか？」

弥平だ。弥平の奴が言い付けやがった。吉次は何も云えなくなった。どう足掻いても大旦那を翻意させることはもう無理だ。

「吉次は確か近在の出であったな。母親が……」

あとの言葉を聞き取ることは出来なかった。心が何処か遠くにあった。大旦那の顔が霞んでぼやけている。村へ帰れと云っているのは何となく分かった。実際、多良屋を追い出されたら他に行くところはない。村にいる母の元に身を寄せるしかない。

いつ座敷を下がったのか、覚えのないまま吉次は使用人部屋にいた。もうここを出なければならぬ。話を聞きつけて集まってきた他の使用人たちの惜別の言葉が遠くに聞こえた。ひとりの使用人が、大旦那様からだと云って荷物を渡した。中には鎌が入っていた。当座の足しにしろということなのだろう。有り難くはあったが、吉次は胸中で笑った。これを何処で売れと云うのだろう。

荷物を背負い、虚ろな心のまま外に出た吉次は、そこに庄助を見つけた。庄助は気の毒そうな、申し訳なさそうな顔を吉次に向けた。

「元はといえば僕のせいだ。僕がしっかりしていればよかったのだが、ほんの軽い気持ちで恨み言を云ったためにこんなことになってしまった。大旦那様に吉次を置いてもらうようお願いしたのだが、聞いてもらえなかった。済まん」

「俺のために……」

吉次は心苦しかった。自分は庄助のせいにして、何とか多良屋を辞めないで済むよう大旦那に懇願したのに、庄助は自分のために大旦那に頭を下げてくれていた――。

「吉次、大旦那様を恨むなよ」

「恨むなどとんでもありません。俺は大旦那に育ててもらったようなもの。恨み言を口にしたら罰が当たります」

「そうか、それならいいが。先日、恨み地蔵の話をしただろう。それでお前が地蔵の元に行きはしないかと心配になってな。いいか、吉次。恨み地蔵を頼るんじゃないぞ。一度頼ってしまうと、次にまた行きたくなる。恨みは増大するものだ。僕は一度お染めの口数が減るのを願った。そのとおりになると、今度はそれだけでは物足りなくなってきた。人間というものは欲深いものだ、このままずっと黙っていてくれないだろうかと考えるようになった」

庄助の顔が次第に紅潮してきた。庄助は吉次を見据えたまま話を続けた。

「しかし応報が恐ろしい。その応報にしても、小さく済めばいいが、と思うようになった。もちろん地蔵のところへは行ってない。が、そんなことを考えているとどうしてもお染めを疎んじるようになり、そんなに悪くなかった夫婦仲がおかしくなってしまった。僕は今、軽い気持ちで恨み地蔵に願掛けしたことを後悔している」

吉次にも庄助の後悔の念は痛いほど分かった。自分も藤十郎への恨み言を云ったばかりに多良屋を辞めさせられ、お勢との仲は風前の灯火だ。吉次はこれ以上庄助と話をしていくとすでに恨み地蔵に願掛けしたことを話してしまいそうで、お辞儀もそこそこにその場を離れた。自分のために大旦那に頭を下げてくれた庄助であっても、姑息で狭量な胸の内を晒したくはなかった。

吉次の足は自然とお勢のいる一膳飯屋へと向かった。ふらふらと歩き、辻の向こうに飯屋が見えてきたところで吉次の足は止まった。

お勢に顔を合わせても、今さら何を云えばいいのか分からない。多良屋を追い出されたから厄介になりたいとでも云うのか。婿になるから置いてくれとでも云うのか。そんなことは云えない。お勢の目にこんな惨めな姿をさらしたくない。いよいよもって見縊られるだけだ。

吉次は辻を曲がり、道を変えた。他に行きべきところはなかった。

吉次の母は夫と息子のひとりを亡くして以来、村にひとりで住んでいる。多良屋に住み込んでいた吉次は、母が帰ってきて欲しいと云わないのをいいことに、そのまま母を村にひとり残した。母をひとりぼっちにさせている後ろめたさはあったものの、立派な商人となって金を稼いだかった吉次は城下を選んだ。

半年に一、二度くらいは帰っているのに、吉次には我が家が妙に懐かしく思えた。子供の頃の、何の憂いも抱いていなかった自分に戻れたような気がして、吉次は戸口を開けた。

突然帰った吉次に、母のお節は少しだけ驚いたものの、優しい笑みを投げかけてくれた。いつもと違う吉次の様子に気づいたようだが、詮索しないで吉次の方から話すのを待っている。

「しばらくいたいんだけど、いいかな？」

「いいも何も、お前の家じゃないか。遠慮なんかして」

「遠慮しているわけじゃなけど……」

吉次は上がり框に腰を下ろした。脇に大旦那からもらった、鎌の入った荷物を置く。家の中を見やる。首を少し動かすだけで全てが把握できる狭い家は、板壁のあちこちが傷んでいた。帰ってくる度に直してやろうと思っていたが、やらずじまいに終わっている。

「多良屋を辞めることになった」

努めて明るく云おうとしたが、声に生气はなかった。

「そうかい。それは残念だったね。とにかくお上がりよ」

母に促され、吉次は我が家の板敷きに腰を下ろした。

「この家もずいぶん古くなったな」

「年寄りがひとりで住んでいるだけだ、古くたって事足りている」

「しかし雨や風が入ってくるだろう。明日、俺が修繕するよ」

「お前が？ やったことはあるのかい？」

「ないが何とかなるだろう。板で塞ぐくらいは出来る」

「そうしてくれると助かるねえ。本当のことを云うと難儀していたんだ、雨や風が冷たくてね」

弱音を吐く母が意外だった。吉次も冬の間に戻ってきたことがあるのでその寒さを知っており、これで少しは親孝行の真似事が出来るかもしれない——吉次はそう思った。

「お勢さんは元気かい？ お前が城下を離れると寂しがるだろうねえ」

母のお節が晩飯の支度を始める。

「離れたといっても半日もかからないから、会おうと思えばいつだって会える」

お勢が会ってくれないのは分かっている。願望を込めて吉次はそう云った。

「お勢さんのためにも、いっそ婿にいったらどうだい？ 喜助さんもそうして欲しいんじゃないのかい？」

「そうかもしれないが……俺は商人として身を立てたい」

云ったあと、吉次は厨に立つ母の背中を凝視した。帰ってきたばかりだというのに、いずれはこの家を出て行くと告げたも同然で、母がどんな反応を示すのかが気になった。

「そう。お前は商人が向いているからね」

背中を向けたまま、お節は独り言のように呟いた。

飯が出来上がり、久しぶりに母子で飯を食う。

「俺は多良屋に負けにくいだけの店を持ちたいんだ。多くの使用人を抱えて忙しい毎日を送る、それが俺の夢だ。そしたらお勢を嫁に迎える。そのときはお袋も一緒だ」

吉次の夢の話に微笑ましく聞いていたお節だったが、一緒に暮らすと聞いて顔を曇らせた。

「お前は城下に店を持ちたいんだろう？ そこへわたしも行くのかい？」

「決まってるじゃないか。こんなちっぽけな村に店を構えてもお客が来るもんか。店を構えるのは城下でなければ駄目だ、多くの人が行き交うからこそ商売が出来るんだ」

「わたしはここが一番だよ。仲良しのお竹さんもいるし、城下に住もうとは思わないよ」

「お竹さんて、村はずれにひとりで住んでいるあのお竹婆さん？」

「そう。昔からいろいろ世話になっているよ」

「まだ生きてたんだ」

子供の頃からお竹婆さんと呼んでいて、かなりの年寄りだと思っていたが、よくよく考えてみると母とは十歳も離れていなかった。

「城下には知った顔はひとりもないし、お勢さんや喜助さんにしてもお前の話にしょっちゅう出てくるから知った気ではいるけど、まだ会ったことはないしねえ……」

「知り合いがいなくて心細く思うのは分かるけど、そんなのは最初の十日くらいなものだ。お勢や喜助さんも力になってくれるだろうから、すぐに慣れる」

「お前が城下に店を構えたとしても、今までどおり村に住んでいたいよ」

「それじゃ、俺が薄情者みたいに思われるじゃないか。お願いだから城下に来てくれよ」

「そうだねえ……考えてみるかねえ」

気のない返事だった。城下で暮らす自分を想像できないのだろう。そして、そんな日がすぐにやってくるとは思っていないようだった。吉次自身、話をしていたんに法螺話をしているように感じられていた。空疎な夢物語に過ぎなかいのかもしれない――。

「それにしてもお袋の作った飯は旨いな。喜助さんのより旨いかもしれない」

「人様に誇れる唯一のことだからね」と、お節が誇らしげな笑みを浮かべる。

翌日から吉次は我が家の修繕を行った。穴を塞ぐだけでは飽きたらず、近所から道具を借りてきて、城下で見かけた普請の様子を思い出しながら本格的に壁に板を打ち付ける。

「これを仕事にしてはどうだい？」と、お節が面白半分真顔半分に云う。

吉次も満更ではなかった。

「俺は何をやってもそこそこはこなせるからな」と、得意げに答えた。もちろんそんなつもりはなかったが、思っていた以上の出来映えに、これなら村の小さな家の一軒くらいは簡単に建てられる、と思った。

吉次が帰ってきたのを聞きつけ、隣家の熊八を始め多くの村人が集まってきた。村人も口々に板壁の出来映えを讃えた。

「うちもやってくれないか」

ひとりの村人の冗談に辺りはどっと湧き、吉次も満面の笑みを浮かべた。子供の頃に村を離れたので帰ってきてほとんど交流はなかったが、それでもこうして村のひとりとして扱ってくれていることが嬉しかった。

笑いが一段落すると村人がひそひそ話を始め、やがてその中のひとりが吉次の前に進み出てた。

「多良屋を辞めさせられたっていうのは本当か？」

吉次はぎくりとし、笑顔を失った。嫌な噂は広まるのが早い。

「ちょっとしたしくじりをやりました……いや、しくじりというよりは人間関係とでもいうんでしょうか、ああいう大きな店はなかなか難しいところがありまして……」

思いつくままに吉次の口は動いた。大旦那を批判したから、とは云えなかった。ましてや、恨み地蔵の応報でそうなったという話は出来ない。

「そうだろうな。あれだけの大店だ、さぞかし大旦那は気むずかしい人だったんだろうな」

同情の口振りで村人が云うと、吉次は我が意を得たとばかりに、口の端に笑みを浮かべた。

「大旦那様はいい人だったんですが、番頭が少々癩癩持ちでして、急に怒り出されることはしばしばでした。虫の居所次第、その日のお天気次第で気分がころころ変わる人だったので、怒られた方は何故怒られたのかがよく分からないような案配なんです。あの日の俺は運がなかったのでしょう、ちょっとしたしくじりで烈火の如く叱られ、あることないことを大旦那様に告げ口されてしまい、こういう羽目に陥ってしまいました」

番頭の悪口を云うことで、多良屋への鬱屈は多少晴れた。大旦那の悪口を云わなかったのは、いずれ城下に戻ったときのためだった。話がどのようにして伝わるかしれたものではない。

「そうか、お前も苦労したんだな。城下で気楽な奉公人をやっているものとばかり思っていたが……。何か困ったことがあったら云ってくれ、力になってやるから」

村人がポンと吉次の肩を叩く。

「俺もついでと」と、他の村人からも声を掛けられ、吉次は目頭が熱くなった。しかし、胸中は複雑だった。いたずらに誇張した話で同情を買ってしまい、忸怩たる思いがあった。

板壁を直し終わり、近くの畦の土を盛ったりしているうちに十日が経った。城下の多良屋に住み込みで働いていたときには、お勢の飯屋は近くにあったので毎日でも行くことが出来たが、歩いて半日もかかる村に住むようになると、そうそう会いに行けない。お勢を怒らせたままでそれ以降会っていない吉次は、お勢がどうしているか気掛かりだった。仕官に失敗した藤十郎は城下を出て、何処か他の国に仕官の口を求めに行っただろうから心配ないにしても、別の藤十郎が現れないとも限らない。それに、黙って城下をあとにした自分の身をお勢が案じてくれているかもしれないと思うと、吉次の胸の中にはお勢に会いたい気持ちが激しく湧き上がってきた。

朝飯を済ませた吉次は母のお節に、ちょっとした用事があるからとだけ言い残し、城下への道を急いだ。自然と心は躍り、足取りも軽い。おまけに空は晴れ渡っていて、全てが好転しそうに思える。胸中の予感めいた不安を、吉次は押し隠した。

住み慣れた城下に入る。城下はいつものように活気に溢れていた。通りには売り子の声が響き、行き交う人はせわしない。そんな人々を縫うようにして、吉次は一目散に一膳飯屋を目指した。

多良屋を迂回し、毎日のように通った辻に来て吉次の足は止まった。多良屋を辞めさせられて城下を出ることになった日、お勢に会いに行こうとして行けずに曲がった辻に立つと、あの日の惨めな自分を思い出し、吉次は一瞬、躊躇を覚えた。状況はたいして変わっていない。藤十郎が城下を出て行ったとしても、お勢の気持ちが再び自分に向かうかどうかは別の話だ。が、ここまで来て引き返せない。吉次は己を鼓舞し、歩を進めた。

飯屋の戸口を開ける。仕事が終わったばかりの人足たちで店内は混み合っていた。忙しく立ち働いているお勢に目を向けると、お勢の方も客が入ってきたと思ったらしく、吉次に顔を向けた。目と目が合う。お勢の口が、あっ、と云ったように吉次の目には見えた。吉次の突然の出現に驚き、動揺しているようだ。それでもお勢は普通の客を迎えるように、吉次に近づいてきた。

「村へ帰ったんですってね」

「ああ。黙ってて悪かったな。急に決まったんだ」

「何も謝ることなんてないわよ。何処へ行こうと吉次さんの勝手ですもの」

妙に醒めた言い方で、吉次はお勢がまだ怒っていると思った。

「話がある」

「無理よ」

お勢の言葉に、吉次はもう一度店内を見渡した。なるほど、今は無理だ。こうやって立ち話をしている間も、他の客がお勢に何か云いたそうな顔を向けている。

「あとどれくらいで空きそうだ？ 話はすぐに済む」

今後に向けてあれこれ話をしたかったが、それは得策でないと判断した。せめて藤十郎がどうなったかだけは聞いておきたかった。

「そうねえ……」と云い、お勢が厨の喜助に困惑の目を向ける。縋るような目だった。

「じゃあ、空いたら出てきてくれ、表にいるから」

吉次は飯屋の戸口を出て行った。お勢の顔色が目に焼き付いていて、萎えそうになる気を奮い起こす。たとえ束の間、お勢の心が藤十郎に傾いたとしても、藤十郎が城下からいなくなっていれば心を通い合わせるのは困難だ、いずれ仕官のない藤十郎に愛想を尽かし、必ず自分の元に戻ってくる――。

吉次がしばらく表で待っていると、お勢が思い詰めた様子で戸口を出てきた。

「どうして黙って村に帰ったりしたのよ」と、険しい顔で云う。

「いや、あのときは気が動転していて……」

お勢の勢いに押され、吉次はしどろもどろになった。

「もう金輪際、ここへは来ないで！」

決然と云い放ち、お勢は駆け出して戸口を閉じた。

棍棒で頭を殴られたかのように、吉次は呆然となった。目の前のぴしゃりと閉じられた戸口が霞んでいる。これは決別の宣言なのか？ もうお勢には会えないのか？ 何がどうなったのだろう――藤十郎はまだ城下にいるのか？

お勢を追いかけて、吉次が勢いよく飯屋の戸口を開けると、中にいた客が好奇の視線を向けた。自分の様相がただないのだろうと思ったが、吉次は気にせずにお勢を探した。しかし、店内を見渡してもお勢の姿は何処にもなく、吉次は厨の喜助に駆け寄った。喜助は渋い顔で吉次を睨みつけ、首を振っていた。

「お勢は？ お勢は何処です？」

「奥の部屋にいる」

向かおうとする吉次を、喜助が手を広げて制した。

「そっとしておいてやれ」

「しかし……」

「事情は儂が話す。今はこのとおり手が離せないから、あとで来てくれ」

「事情って何です？」

「だから……話はあとだ」

喜助に背中を押され、吉次は酔って迷惑をかける客のように、店の外に追い出された。お勢たち父娘にとって忌むべき存在になってしまったようだ。吉次は隔世の感があった。村に帰っていた僅か十日の間に何かが起こったのは確かだった。何が起こったというのか。

吉次は辺りを歩きながら考えを巡らせた。

お勢の心が離れてしまったのは疑いようがない。それは何故なのか。黙って村に帰ったのを怒っていたが、何か話したいことがあったのだろうか。それならさっきすればよかったのにしなかった。ただ、金輪際来ないで、と拒絶した。縁談の話でもあったのだろうか。どこぞのお節介が持ち込まないとも限らない。縁談でないにしても、藤十郎の他に言い寄る男が現れたのかもしれない。

いや、多良屋を辞めさせられたからだ。お勢は多良屋の行く末を気にかけていた。多良屋の使用人でなくなり、金を稼げなくなった俺に愛想を尽かしたのかもしれない。違う。お勢はそんな女じゃない。親父だ。親父の喜助が俺を嫌っていて、どうしても俺との仲を許そうとしないに違いない、きっとそうだ。藤十郎は何も関係がなく、喜助がそもそもの元凶だったんだ——。

次々と疑念が湧き上がり、吉次は狂わんばかりになった。絶望の中に微かな希望を見出しても新たな絶望があっさり呑み込んでしまう。

飯屋を出てどれくらい経ったのだろう。よく分からなかったが、吉次は居ても立ってもいられなくなり、飯屋への道を引き返した。戸口を開けると、中にはふたりの人足が並んで飯を食っていた。お勢の姿はなく、おそらくまだ奥の部屋に隠れているのだろう。喜助が厨から手招きする。吉次は吸い寄せられるように厨へ足を運んだ。

「あの客が帰ったら店を閉めるから、そこら辺に座ってろ」

喜助が飯を食っている人足たちを顎でしゃくる。吉次も人足たちに目をやりながら腰を下ろした。やがて人足たちは勘定を置き、店を出て行った。喜助は人足たちが外へ出ると、戸口にかかっていた縄暖簾を外した。

「これで邪魔は入らない」

座っている吉次の正面にたち、喜助が洗面で吉次を見下ろす。

「お勢は奥ですか？」

「ああ。さっきからずっと奥の部屋で塞ぎ込んでいる。呼び掛けても、うんともすんとも云わない。お陰で忙しいさなか、てんてこ舞いだった」

「お勢はどうしたんです？ 俺が村に帰っていた間に何があったんです？」

喜助が吉次を見据える。

「佐倉藤十郎様だよ」

「藤十郎……あの浪人者がまだ何か？」

この国での仕官の道を断たれ、城下を去ったものと思っていたのに、その影はまだ城下にあったようだ。吉次に藤十郎の巨大な影がのしかかる。

「お前が村に帰った日、店に来られてな、隣国で仕官の口を探す、叶ったら一緒に来てくれるか、とおっしゃった。お勢はお前とのことがあったからそのときは返事をしなかったが、佐倉様は仕官が決まり次第、返事が欲しいとおっしゃってな、それが昨日だった」

「昨日……それで結果は？」

吉次は聞くのが怖かった。お勢の態度を見ていれば自ずと推察される。

「佐倉様の仕官は叶えられた。隣国から戻られた佐倉様はお勢に返事を訊きに來られた。お勢の返事は……一緒に行かせていただきます、だ」

「ああ……」

両手で顔を覆い、吉次はうなだれた。

「残念だろうがお勢を恨まないでくれ。お勢はお勢なりに悩んだんだ。お勢はお前のことが好きだったが、これ以上はない良縁が舞い込んできたんだ。聞けば佐倉様のご先祖は頼朝公の御家人に繋がるらしい。由緒ある家の出だったが、主家が討ち果たされ、流浪の身となられたそう。以前は勘定方を務めておられていて、この国では無理だったが、幸い隣国には空きがあってすぐに仕官が叶ったということだ」

「嘘だ！ 嘘だ！ 藤十郎の云うことなど出任せに決まっている！」

吉次は吠えた。お勢の裏切り、藤十郎の横奪。何もかもが、腹が立って仕方がない。

「そう思いたい気持ちは分かるが……まあ、頼朝公の御家人云々の話は怪しいにしても、仕官が叶ったのは本当のことだ」

「良縁だから俺を棄てるっていうんですか？」

「棄てるなんて……そんな風に云うな。お前も悪いんだぞ。肝心なときにいなかったじゃないか。お勢を放って村に帰ったりして……多良屋を辞めたのも黙っていたし、お勢がどんなにかお前と相談したかったことか」

そのことを云われると吉次は何も云えなかった。しかし、黙っているわけにはいかない。

「さては喜助さんが何か云ったのでしょうか？」

「何かとは何だ？ 儂が、佐倉様の嫁になれ、と強要したとでも思っているのか？」

吉次の心中を見透かしたかのように喜助が云う。

「そう思いたくもなりますよ」

「儂を見糞るな。これでもわしはお勢の幸せを一番に考えている。あれには儂の不始末のせいである苦勞をかけたからな、親の云うことを聞け、などと偉そうなことは云えない。お勢がお前を選んでいたら儂はそれに従った。あの日、佐倉様がお勢を嫁に欲しいと来られた日、お前が傍にいたなら違った結果になっていただろうな。お勢は悩んだあげく佐倉様を選んだ。自身の意志によってな」

「嘘だ……」と吉次は呟いた。違った結果になっていたかもしれないと思うと、胸が締め付けられた。ほんの些細なためらいが、お勢を遠くに連れ去ってしまった。

「嘘なものか。お勢は自分のため、そして儂のために佐倉様のところへ行くと決めたんだ」

「お勢が隣国へ行ったら喜助さんはひとりじゃないですか。婿をとってこの店を守りたかったのではないですか？ お勢もそのつもりだったのでは？」

「農も一緒だ。この店は守りたかったが、お勢が幸せになるのなら惜しくはない」

「しかし……」と、吉次は尚も反論を試みようとした。何とかこの婚儀に難癖をつけたかった。それ以上の言葉が思いつかず、一旦口を閉じたが、痛撃なひと言が閃いた。

「相手は武家、しかもそれほどいい家柄なのなら、あれやこれやのしきたりが多くて、上手く行くはずがない。藤十郎もすぐに目が覚めますよ。それに、当人はどうであれ、親族が反対するに決まっています」

「佐倉様の家柄は関係のない話だ。確かに由緒正しい生まれには違いないが、佐倉様は身分の違いを意に介されておられない。親族も喜んで賛成してくれた、と佐倉様はおっしゃったが、それは方便だろう、反対はあったようだ。親族にしてみれば、一膳飯屋の娘、しかも出は百姓だ、そんな娘との婚儀を喜ぶわけがない。何とか説き伏せることが出来たというのが真実だろう。それだけお勢のことを思ってくださっているのだ」

「真実？ 藤十郎の真実はそうかもしれませんが、それではお勢の真実は何処にあるのですか？」

「佐倉様を選んだ、それが真実だ」

「違う！ お勢は喜助さんのために、本心を隠して藤十郎の嫁になろうと決めたんだ。自分を犠牲にして、喜助さんに楽な暮らしを与えようとしているだけだ。よしんば、本当にお勢の心が俺から離れてしまったのなら、取り戻してみせるだけのことだ！」

そう叫ぶと、吉次は飯屋を飛び出した。胸中に黒い塊があった。

こうなったら再び恨み地蔵を頼るしかない。

この国での藤十郎の仕官が叶わないという恨み地蔵への願いは果たされたが、隣国で仕官が叶ってしまった。あのとき仕官がどうのこうのと願わないで、藤十郎がお勢の目の前から消え去るのを願えばよかったんだ。そうすれば藤十郎がお勢を連れて隣国へ行くなどということにはならなかっただろう。いや、駄目だ。それでは自分もお勢の前から消えなければならなくなる——。恨み地蔵に何を願うか、最善の方策は何か、そのことだけを考えながら、吉次は峠へと足を急がせた。

黒い憎悪が吉次を衝き動かしていた。沸々と煮えたぎり、抑えようにも抑えきれない藤十郎への憎悪。そしてその脇に新たな憎悪が現れた。それはお勢への、愛しさ故の憎悪だった。

裏切られた……。いくら相手が家柄のいい侍だからといって馬鹿にするな。最初からそうだったんだ。藤十郎出会ったときから、お勢は俺と藤十郎を両天秤にかけ、どっちが得か計っていやがったんだ。

吉次の足がますます速くなる。日はすでに翳り始めており、速く歩いたところで峠に着く頃には夜になっているだろう。それでも吉次は歩みを緩めなかった。歩みを緩めてしまうと憎悪が鈍りそうな気がした。

やがて陽が傾き、闇が迫り始めた。吉次は月の明かりを頼りに山道を上った。

峠の茶屋に着いた頃には夜もだいぶ過ぎていた。茶屋の明かりが吉次の疲れた躰を優しく包む。仁念が眠っていたら申し訳ないと思っていたが、どうやらまだ起きているようだ。今夜はここに泊めてもらうつもりでいる。仁念の淹れてくれる茶を早く飲みたいものだと思いながら、吉次は茶屋の前を過ぎた。

地蔵が見えてきた。月の明かりに照らされた地蔵は神秘的で崇高でもあり、また不気味で禍々しくもあった。闇の世界を支配しているような雰囲気漂わせており、吉次は急に恐怖を覚えた。

こんな闇の中で恨み地蔵に願掛けをするなど、常人の沙汰とは思えない。

俺は狂っているのだろうか——。

それでも構わない、と吉次は思った。

ここで恨み言を願えば何かが起きる。庄助は妻のお勢が喋れなくなるのを願い、膝を腫らして歩けなくなった。吉次は藤十郎の仕官が叶わないのを願い、応報として子供の頃から働いていた多良屋を辞めさせられ、城下を去らざるを得なくなった。今度は何が起きるのか。それは願うことと相対している。願いが大きければ応報も大きく、小さければ応報も小さい。吉次は道中からずっと考えていた。本当は藤十郎をこの世から消し去りたいところだが、応報を考えるとそれはあまりに恐ろしくて出来ない。前回のように中途半端な願いでは、たとえ願いが叶ったとしても決定的なことにならないかもしれない。藤十郎とが二度とお勢に会えなくなるように願えば、同じことが降りかかってくる。それでは元も子もない。いったいどうすればいいのか。ひとつの考えはずっと心の奥底にあったが、それは怖くて隠しておきたかった。しかし応報を恐れているは何も始まらない。吉次の肝は据わった。地蔵の前で手を合わせ、吉次は目を閉じた。

藤十郎の中にあるお勢の記憶が、一切合切、消えますように。

胸中で唱え終え、吉次は目を開けた。

これで自分の中にあるお勢の記憶もなくなってしまう——恐ろしいことではあったが、絶望的な今の状況から藤十郎と横並びになるのだから良しとしよう。いや、寧ろ自分の方が優位といえるくらいだ。藤十郎は仕官が叶って隣国へ行く。お勢もついていこうとするだろうが、お勢の記憶をなくした藤十郎が承知するはずがないし、お勢を頭のおかしな女と思うかもしれない。親族はこれ幸いにと、お勢との婚儀を白紙に違いない。喜助は怒るだろう。しかし、武家を相手に出来ることは何もない。

吉次は山道をゆっくり下り、茶屋の前に立った。

地藏への願掛けは済んだ、あとは茶屋の主人に頼み事をしておかなければならない。

「おや、吉次さん、あなたでしたか」と、中へ入った吉次を仁念は微笑んで迎えた。その声は囁くように小さかった。

「泊めて欲しいのですが」

吉次も何かわけがあるのだろうと思い、声を潜めた。

「ええ、どうぞ。先客がありまして、もうお休みですからお静かに願います」

吉次は、分かった、と頷いた。

音を立てないようにしずしずと歩く仁念に続き、吉次も板敷きに上がった。先客は板敷きの奥で、背中を向けて寝ていた。若い侍のようだ。ぐっすり眠っているらしく、小さな鼾を立てている。邪魔にならないように吉次は侍から離れて座った。

「食事はどうなさいますか？」

「頼みます。それと酒も」

承知しましたと引き返す仁念を吉次は呼び止めた。一刻も早く頼み事を済ませなければならなかった。

「実は、頼み事があるのですが……」

「わたしでよければ何なりと。食事をお運びしたあとにでもゆっくり……」

「いや、それでは遅いかもしれない。変に思われるかもしれませんが、いつ起こるかも分からないことなので」

吉次が苦悶お顔をすると、そういった顔を何人も見てきたのだろう、仁念はすぐに察した。

「恨み地蔵へ行かれましたね？」

ゆっくり頷き、吉次は仁念を見据えて話を始めた。

「ここへ来る前に、恨み地蔵に願掛けをしてきました。その応報で、もうすぐ俺はある女性を忘れてしまうんです。その女性は俺にとってとても大切な存在で、忘れるわけにはいかないんですが、それは無理でしょう。今こうして話をしているうちにも忘れてしまうかもしれません。忘れてしまっただけでは思い出す手だてがありませんから、それを頼みたいのです」

うんうんと頷き、仁念は真摯に聞いている。

「女は名をお勢と云います。城下で一膳飯屋をやっている喜助という男の娘です。働き者の娘で、一緒になりたいと思っていたのですが」

「邪魔者が現れたので恨み地蔵に行かれたのですね？ 前におひとりで来られたとき、ずいぶん慌ててお出ででしたが、あのときも地蔵に行かれたのではありませんか？ 恨み言は回を重ねると、より強くより深くなるものです。もっとももっとと思う気持ちが抑えきれなくなり、しまいには身の破滅になります。そういう方をわたしは何人も知っております」

吉次は顔を強張らせた。自分が破滅の一步手前にいると自覚せずにはいられない。

「十日ほど前に来たときが最初で、今日が二回目。地蔵の恐ろしさは重々承知していたのですが欲に負けてしまい、今では後悔しております。どうか俺の頼み事を聞いてください。俺が惚れた女はお勢だったと、それだけ覚えておいてくれればいいんです」

吉次は自分が嫌でならなかった。自分が酷く矮小で卑劣に思えてならなかった。藤十郎はお勢の記憶を全く失ってしまうというのに、自分は失ったあとの算段をしている。どうしようもなく嫌な奴だ。だが、何としても藤十郎を出し抜きたい。

「分かりました。あなたはもう溺れかけておられるようだ、今日を最後になさるといっているのであればお手伝いいたしましょう。しかし、わたしなんかでよろしいんですか？ もっと身近に話を聞いてくれる方はおられないんですか？」

吉次の大事な役目を引き受けることに、仁念はためらいを見せていた。それは巻き込まれたくないというのではなくて、自分を相応しくないと考えているようだった。そんな仁念を無理矢理巻き込んでしまい、吉次は申し訳なく思った。顔を見知っている程度で、仁念にしてみれば吉次はたんなる客でしかない。しかし、事は急がれる。

「家にお袋がいます。ですが、家へ帰り着く前に、わたしの中にあるお勢の記憶が消えてしまったらと思うと怖くて……。お勢の名を口にしなくなった俺を不審に思い、いずれお袋がお勢の話をするかもしれません。それはいつの日になるか分かりませんし、もししてくれなかったら、俺は村に住んでいますから、城下のお勢には永遠に会えなくなるかもしれないんです。仁念さんのことは覚えているはずですから、近いうちにまたここへ来ます。そのときは俺にお勢という想い人がいたことを教えてください。手紙を書いておきます、お勢の記憶をなくした自分宛の手紙を。そうすれば記憶を書き留めておくことができますから。それを読めば、完全ではないにしてもお勢の記憶を取り戻せます」

「近いうち……。それなら大丈夫かもしれません。あまり先ですと、わたしが吉次さんを忘れてしまうかもしれませんよ」

笑みを浮かべて仁念が云うと、仁念の冗談に吉次も笑った。溺れかかっていた吉次は救われる思いがした。茶屋を覆っていた重い緊張が霧散し、吉次は空腹を覚えた。

「まずは紙と筆を。そのあと食事をお願いいたします」

「かしこまりました」

仁念が板敷きを下りていき、吉次は書き留めておくべきお勢との思い出を脳裏に描いた。仁念が戻ってきて紙と筆を渡す。吉次は筆を走らせることに没頭した。しばらくして仁念が食事を持ってきたが、それでも止めなかった。吉次の邪魔をしないように仁念が食事をそっと置いていく。吉次は気づいていなかった。気づかないまま自分への手紙を書き続けた。

手紙を書き終え、吉次は何度も読み返した。その度にそのときの状況が目の前に思い浮かぶ。あのときはああだった、こうだったと小さく口に出して云う。ここに書いた全てが自分の中から消えてしまうのかと思うと、自分で仕向けておきながら吉次は、やるせなくて仕方がなかった。

これでよかったのかと自問する。いいに決まっていると云い聞かせる。他に方策はなかったのかと思う。すでに恨み言を云ったあとだったが、何かが違っているような気がした。恨みを果たせたとして、それで幸せになれるのだろうか――。

心の迷いを払拭するかのように、吉次は冷え切った飯を食った。今さら何を考えても遅い。何も考えまいと酒を飲んだ。そしていつしか眠りに落ちた。

目覚めた吉次は、慌てて枕元の手紙を拾い上げた。書いたことは覚えているし、読まなくとも内容も覚えている。お勢のことを書いた手紙だ。お勢――眠っている間にその名前を忘れてしまうのではないかと恐れていたが、まだ大丈夫なようだ。ふうっと安堵の溜め息を吐き、微かに笑みを浮かべた吉次だったが、その顔はすぐに沈んだ。所詮、先に延びた過ぎない。いずれそのときはやってくる。

夕べの遅い膳は吉次が起きる前に片付けられていた。板敷きの向こうで眠っていた若い侍の姿はなかった。すでに出立したようだ。

「仁念さん、仁念さん」

手紙を懐にしまいながら、吉次は仁念を探した。この手紙を仁念に預かってもらわなくてはならない。しかし、吉次が呼び掛けても仁念の返事はなかった。恨み地蔵に願掛けをしたあとだけに、妙な胸騒ぎがする。仁念は厨にもいないし、奥の部屋にもいなかった。外で薪でも割っているのかと戸口を出る。朝の眩しい光の中、茶屋の周りとぐるりと探してみたが、そこにも仁念の姿はなかった。不安に駆られ、吉次が山道を上っていると、仁念が水桶を手に持ち、山道を下りてきていた。地蔵を清めに行っていたようだ。

「お目覚めでしたか」と、仁念が近づきながら声を掛ける。

「姿が見えないので心配しましたよ、何かあったのではないかと」

「わたしは大丈夫でしたが、実はつい今し方、妙なことがありましてね。恨み地蔵の仕業ではないかと思っているのですが……詳しくは中で、目覚めの茶でも飲まれながら」

仁念に続いて茶屋の中に入り、板敷きに腰を下ろす。

「夕べお泊まりになっていたお侍さんなんですがね……」と、話しながら仁念が茶を運んできた。

「今朝、早くに出立されたようですね」

「ええ。隣国へ向かわれるということでした。わたしも地蔵の周りを掃除しに行きますので同行したんです。道々に地蔵の話をして笑って、恨み言を聞いてくれる地蔵などあるはずがない、地蔵は衆生の健気な願いを聞き届けてくださるものだ、とおっしゃるのです。いくつか事例を並べてお話ししましても信じてくれません。お侍さんは手を合わせ、何か祈っておられましたが、地蔵の罰が当たったのか、何処からか飛んできた鳥がお侍さんの前をひゅっと横切り、それに驚いたお侍さんは鳥を避けようとして山道を踏み外され、谷へ……」

「落ちたのですか？」

思わず訊く吉次に、仁念は頷いた。

「といっても、転げ落ちた程度でたいしたことはなかったのですが、それでも頭を打たれたようで、足元がふらついておりました。山道まで引き上げ、大丈夫ですかと声を掛けると、恥ずかしそうに笑いながら頭に手をやられ、血が流れていないか確かめられました。血は流れておりませんでした。しかし、僕はここで何をしていたのだ、とおっしゃったのです。これから隣国へ向かわれるところですよと申し仕上げますとお侍さんは、何をしに隣国へ行くのだ、と……。これは頭を強く打ったためにもものをお忘れになったのだと思い、いろいろ訊いてみました。するとわたしのことも御自身のこともしっかり覚えておられるのです。何から何までしっかり覚えておられるのに、隣国へ何をしに行くのかが思い出されないのです。ねえ、不思議な話でしょう」

その侍は藤十郎ではないか、と吉次は思った。藤十郎は頭を打ち、お勢の記憶をなくしたのだ。おそらくお勢のことで隣国へ向かっていたのだろう。しかし、お勢の記憶をなくしたために、何故隣国へ向かっていたのかが分からなくなったのだ。恨み地蔵は願いを聞き届けてくれたようだ。次は俺の番だ――。

黒い影が目の端に映り、はっとして、吉次は頭に手をやった。烏が見えた気がした。

「どうかなさいましたか？」と仁念が訊く。

「いや、何でも……」

烏がいるわけがない。ここは茶屋の中だ。恐れているから幻を見たようだ。吉次は幻に怯えている自分を笑った。恐れていてもそれは確実にやってくる。しかし、お勢を忘れるにしても、藤十郎のように崖から落ちたくはない。出来るなら寝ている間に消え去って欲しいものだ――。

「それでその侍は？」

「そのまま峠に向かわれました。無理をしないように止めたのですが、向こうへ行けば思い出さだろうとおっしゃって……。何でも、仕官が叶ったとかで嬉しそうでした」

やはり藤十郎に間違いなかった。タベ板敷きの向こうで背中を向け、鼾を掻いて寝ていたのは藤十郎だった。地蔵を頼らずとも、タベのうちなら藤十郎を何とでも出来ただろう。寝ている藤十郎の首を絞めることも出来ただろうし、谷底へ突き落とすことも出来ただろう。そう思うと、吉次は恐怖を感じた。タベの侍が藤十郎だと知っていたら、確実に自分の手でことを起こしていた。そこまで人を憎んでいる自分が恐ろしかった。

懐から手紙を取り出し、仁念に託す。

「近いうちに必ず受け取りに参ります」

大切な宝物を押し頂くように、仁念は頭を下げて手紙を受け取った。

城下への帰り道、吉次は胸中で、お勢、お勢、と唱え続けた。無駄だろうが、そうやっていれば地蔵の応報は効かないかもしれないと思った。

畑の上空を鳥が飛んでいる。鳥といわず、小さな雀であっても吉次は身構えた。目線を道に落とし、出っ張りに気をつけながら歩く。庄助のように転んで、その際に頭を打つかもせず、吉次は周りの全てに気を配りながら城下へ向かった。城下に着くと人とぶつかるのを恐れた。屋根の瓦にも気をつけた。吉次の神経は悲鳴を上げそうになっていたが、お勢と唱えるのは忘れなかった。

結局、何事も起こらず、吉次は一膳飯屋の戸口を開けた。見覚えのある顔がこちらに近づいてくる。確かにお勢だ。まだお勢を覚えている。それは喜ぶべきことだったが、近づくお勢を見ていて吉次の脳裏に嫌な考えが浮かんだ。

俺はまだお勢を覚えているが、お勢は俺のことを覚えているのだろうか。地蔵の応報がお勢に向かわないとも限らない。仁念から聞いた山賊に襲われた男の話では、応報は恨み言を云った男には向かわずに、その妻に向かい、妻が狼に食い殺された。お勢の中から俺の記憶が消え去っていたとしたら、お勢の心は藤十郎で占められることになる。

しかし、その杞憂はすぐに晴れた。

「吉次さん、話があるから外へ」

お勢は吉次の目をまっすぐに見つめて云い、一旦引っ込んで喜助と話したあと、すぐに吉次の元に戻ってきた。お勢が覚えてくれていて安堵したが、決然としたその目には温かみがなく、事態がまだ何も変わっていないのを吉次は悟った。

お勢に連れ出され、お堀端へ向かう。黙って後ろをついていくその間、吉次はお勢の首元を見つめていた。辺りには誰もいない。藤十郎に奪われるくらいなら——。邪心に吉次が呑み込まれそうになったときだった。前を歩いていたお勢がくるりと振り返った。

「吉次さん、本当にごめんなさい。申し訳なく思っているわ。今でも吉次さんへの気持ちは変わらない。でもね、それだけじゃどうしようもないのよ、分かって……」

お勢の瞳から大粒の涙がはらりと落ちた。

「分かるもんか。分かりたくもない。藤十郎の仕官が叶って心変わりしたんだな。それに引き替え、俺は多良屋を追われ、今じゃ職なしだ。誰が考えてもどっちが得かはっきりしている」

「違うわ。家柄だとか侍の身分だとか、そんなことでわたしが心を動かされたと思っているようだけど、それは違うからね。藤十郎様のお人柄に惹かれたからよ」

お勢が涙ながらに訴える。

「多良屋を辞めた日、吉次さんはわたしに何も云わずに城下を去っていったわ。そんな大切なことをわたしには何も云ってくれなかった。目と鼻の先にいるのに、わたしを素通りして村に帰ったのよ。あとで知ったわたしがどんなに寂しい思いをしたと思っているの」

「あのときは……」

言い訳しようとした吉次は、諦観と惨めさで口を噤んだ。何を云ってももう遅い。

「そして藤十郎様はその胸の想いを打ち明けてくださった日、そんな大事な日に吉次さんは傍にいてくれなかった。吉次さんに、やめろ、と云って欲しかった。わたしは返事を延ばしてもらって吉次さんを待ったわ。だけど吉次さんは来てくれなかった。わたしは放っておかれた。いつまでも放っておかれる気がして……だから決めたの。お父つぁんのためじゃない、わたしのために決めたことなの。お父つぁんはまだあの一膳飯屋をやりたがっていたけど、離ればなれになるのが嫌で一緒に来てもらうことにしたの。……藤十郎様は素晴らしいお方だわ。初めはからかわれているのかと思ったけど、お話を伺ううちにとてもそんなことの出来る人じゃないと分かったわ。何より、本気で親族を説得してくださったのよ。藤十郎様は唯一の拠り所である親族に反対されながらも気持ちにぶれを起こされなかった。そんな藤十郎様をわたしは尊敬しているわ」

尊敬——吉次は躰の中を何かがすうっと通り過ぎたのを感じた。

それが藤十郎と俺の差というわけか。どう足掻いてもお勢を翻意させることは不可能なようだ。

「そうか。達者で暮らせよ」

お勢に背を向け、吉次は小さな声で云った。自分の歪んだ顔を見られたくなかった。

惨めな敗北感、言い様のない虚無が吉次を覆う。

受け入れがたい現実、しかし、受け入れなければならない。もういい加減、潮時だ——。

我が家へ帰る道すがら、今、お勢の記憶が全て消えてしまったらどんなにいいだろうと考える。地蔵の応報も今なら怖くない。寧ろ願っているくらいだ。鳥が飛んでいるのを見ては、こっちへ飛んできて俺を驚かせてみろと念じてみる。だが、鳥はいっこうに近寄ってくる素振りを見せない。吉次は道端の小石を拾い、鳥に向かって放り投げた。怒った鳥が向かって来るかと思っただが、鳥は上空でぐるりと輪を描き、畑の柿の木に留まった。もうひとつ小石を拾い上げた吉次は、投げつけようとしてやめた。自分のやっていることが酷く滑稽に思えてならなかった。

すでに辺りは暗くなっている。吉次は早く家に帰りたかった。こんなつまらない日は酒を飲んで眠るに限る。目覚めたときにはお勢のことを忘れているだろう。

村に辿り着き、我が家に目を向けた吉次は、自分の目を疑った。明かりが灯っている。仄かな明かりが確かに見える。どうして我が家に明かりが——誰もいないはずなのに。盗人でも入ったのか。吉次の家に金はないが、金目のものはある。多良屋の大旦那にもらった鎌や包丁の類だ。売る機会がなかったのもそのままにしていたが、誰かが聞きつけて盗みに来たのかもしれない。

道を急ぎ、恐る恐る我が家に近づく。明かりの中に人の動く姿が映った。やはり誰かいる。吉次は身構え、そっと戸口に手をかけた。

「そこで何をしている！」

見ると五十がらみの女が厨に立っていた。

「何をって……」

不意に現れた吉次を見ても、女はさして驚いた様子を見せなかった。

「何をしていると訊いているんだ！」

吉次は女の空惚ける態度に腹が立った。盗人ではないようだが、怪しいことこの上ない。

「何を云ってるんだい。晩飯の支度じゃないか」

「よくもぬけぬけと。人の家に黙って上がり込んでおきながら、飯まで食おうって云うのか」
狐につままれたように、女はまじまじと吉次を見た。

「どうしたっていうんだい？」

「それはこっちの台詞だ。けがをしないうちに、とっとと出て行きやがれ！」

女の肩を掴み、吉次は戸口へと女を引っ張った。吉次の勢いに、女は転びそうになった。

「お前、母親に向かって何てことを」

「母親だあ？ 俺は天涯孤独の身。母親なんていねえ」

女は呆然と吉次を見た。唇をわなわたと震わせ、顔の色を失っていた。

「何てことを……わたしを忘れたのかい？」

「忘れるも何も、あんたが何処の誰かなんて初めから知らないし、俺には関係のないことだ」

「お前はそんな風にわたしのことを思っていたんだね。わたしなんかいない方がよかったんだらう？ ひとりで暮らしたかったんだらう？ どうしてそんなになってしまったんだい？ お前の気に障ることを何かしたのかい？ もししたのなら謝るよ」

女は話をしている涙が止まらなくなり、嗚咽を漏らし、その場にへたり込んだ。

「ここにいることが気に障るんだよ。さあさあ」

女の腕をとって立ち上がらせ、吉次は女を戸口の外へ放り出した。吉次の力に抗えず、女はされるがままに転がされ、土埃にまみれた。

「生きているうちにこんな仕打ちを受けるとは思いもしなかったよ」

女は泣きながら闇の中に走り去った。

見知らぬ女だったとはいえ、少し乱暴すぎたかなと吉次は自省した。だが、縁もゆかりもない女を家に上げるわけにはいかない。吉次は板敷きに上がってごろりと横になった。無理から自分を納得させようとするが、地面を転がる女の姿が目につかび、どうしても自己嫌悪が湧き上がった。

それにしても妙な女がいたものだ。ああやって家々を廻っては施しを受けているのだろう。それとも死んだ息子が忘れられず、狂人となって彷徨っているのだろうか。どんな素性の女かは知らないが、何とも痛ましい境遇だ。思慮の浅さが少しだけ後悔させられる。

吉次の鼻を夕餉の匂いが刺激した。女が支度をしていたのを思い出し、吉次はやおら起き上がって厨へ下りていった。鍋の蓋を取ると、ふわりと湯気が上がり、吉次の腹が鳴った。知らない女が作った料理に薄気味悪さを覚えながらも、あとはよそおうばかりになっており、空腹に勝てない吉次は鍋の中の芋を食べた。旨い。食べ慣れた味だ。これをあの女が作ったのか――。

胸騒ぎを覚え、吉次は辺りを見渡した。すると飯の椀がふた組あった。俺は誰かと一緒に暮らしていたのか？ いや、ひとりだったはずだ。しかし――あの女は母親だと云っていた。俺のお袋――お袋って誰だ？ 名前は？ 吉次は頭を抱えた。母親のことを思い出そうとするが、何も思い出せない。父や兄が死んだことは覚えている。しかし、母が死んだという記憶はない。どうして思い出せないのだろう。吉次は再びふた組の椀に目をやった。俺は誰と暮らしていたんだ？

あの女か？ あの女は本当に俺のお袋なのか？

吉次は不意に顔を上げた。お勢の顔が浮かんでいた。

まだお勢を覚えている。お勢を覚えているのにお袋が思い出せない。ということは、恨み地蔵の応報はお勢を忘れることではなく、お袋を忘れることだったのか――。

「何てことだ！」と怒声を発し、吉次は戸口に駆けた。

女を放り出した戸口に立ち、暗闇の左右を見やる。月明かりに浮かぶ畦が仄かに見えるが、女の姿は何処にもなかった。暗い中を遠くに行くはずがない。吉次は熊八が住む隣家の戸を叩いた。

「熊八さん、熊八さん」

熊八は口を動かしながら出てきた。飯を食べていたようだ。

「どうかしたのか？ 血相を変えて」

「女が……いえ、お袋が来ませんでしたか？」

「お節さんが？ いや、来なかったぞ。何かあったのか？ さっき争うような声でしたが」

節という名なのか。やはり俺はお袋と暮らしていたようだ。

「ちょっと喧嘩をしまして……それで出て行ってしまいました」

「あんなに仲のよかった親子でも喧嘩をするんだな」

あんなに仲のよかった——熊八の言葉が吉次の胸に突き刺さる。そんなお袋を俺は叩き出してしまった。

「ここへ来ていないとなると何処へ行ったのでしょうか？ 熊八さんに心当たりはありませんか？」

「心当たりといわれてもなあ。お竹婆さんのところじゃないか。お前が戻ってくるまでは独り身同士ということもあって、仲がよかったからな」

お竹婆さんなら知っている。子供の頃に会ったきりだが、まだ生きていることは知っていた。何故知っているのだろう？ 村に戻ってからお竹婆さんに会っていないし、誰かとお竹婆さんの話をした覚えもない。なのに何故？ お袋か？ 俺はお袋とお竹婆さんの話をしたのか？

「ありがとうございます。そっちへ行ってみます」

吉次は頭を下げ、村の奥へと駆けていった。

きっとお竹婆さんのところにいる。そう自分に云い聞かせ、吉次は駆け続けた。

お竹婆さんを相手に薄情な息子を愚痴っていることだろう。恩知らずと罵っていることだろう。そうあって欲しいと吉次は心から願った。

駆けていく先にお竹婆さんの家の明かりが見えるはずだった。しかし、明かりが灯っていない。吉次の足は止まった。お竹婆さんはもう眠ってしまったようだ。お袋はいるのだろうか？ いるはずだ。吉次は明かりのない家に向かって歩き始めた。眠ってしまった年寄りを起こすのは申し訳なかった。それでも歩みを進め、吉次はお竹婆さんの家の戸口に立った。

「夜分、恐れ入ります。吉次です」

お竹婆さんは昔から耳が遠いので、吉次は大きな声を出した。しばらく待っていると中から物音がして、お竹婆さんが昔のままの顔を戸口に見せた。眠そうなその顔は吉次を見て驚き、そして軽蔑の色を浮かべた。

「本当だったんだねえ。まあ、中へお入り」

何かを知っているようだ。逸る気持ちを抑え、吉次は中へ入った。お節はいなかった。

吉次の逸る気持ちとは裏腹に、お竹婆さんはお茶でも淹れようかと厨へ向かった。

「お茶は結構ですから、それより……」

吉次も厨へ行った。お竹婆さんは耳が遠い。

「そうかい」と云いつつ、お竹婆さんはお茶を淹れていた。痺れを切らした吉次は、お竹婆さんの淹れてくれた茶を自分で板敷きに運んだ。

「お袋がここへ来たかと思いますが」

「ああ、来たよ」

お袋はここへ来ていた。足取りの一端が分かり、吉次はひと安心した。

「それで、今何処に？」

「さあ」

「分からないのですか？」

お竹婆さんは静かに首を振った。知っていて教えないのではないかと吉次は疑った。あるいはお節から口止めされているのか。どうであれ、お竹婆さんの心証を悪くしているのは間違いなかった。座った切り目を合わそうとしない。

「お袋とどんな話をしたんです？ 後生ですから教えてください。お袋はさぞ怒っていたんでしょうね？」

お竹婆さんの顔がすうっと吉次に向いた。

「お袋お袋って云うけど、お節さんを本当に母親だと思っているのかい？」

「当たり前じゃないですか。わたしにお袋はひとりしかいません」

「それにしてもはずいぶん酷いことをしたものだねえ」

お竹婆さんが吉次を非難の目で見ると。

「俺はどうかしていたんです。悔やんでいます。ですからこうやって早く謝ろうと方々を探しているんです」

「お節さんはあんたがいずれまた家を出て行くのは覚悟していたよ。息子がそうしたいだろうからってね。だけど本心は一緒にいたかったんだ。だから束の間でも一緒にいられる時間を惜しんでいたんだよ。それなのにあんたは……」

ああ、と呻き、吉次は突っ伏して泣いた。悔悟で心が張り裂けそうだった。

「わたしも悪かったのかねえ……」

吉次を非難していたお竹婆さんが、一転して内省の言葉を口にする。

涙を手で拭いながら吉次は顔を上げた。

「どういうことです？」

「わたしがこんな風に村の人たちの助けを借りて何とか生きてこれたものだから、同じようにひとりで生きていこうと決めてしまったようだよ、お節さんは。わたしは本当に天涯孤独だから仕方がないけど、お節さんにはあんたがいる。無理にひとりで生きようとしなくてもいいんじゃないのって云ったんだけど、ただ笑ってね、わたしはいいのよって云うだけでね……妙な手本になったようで心苦しいよ」

お竹婆さんの目からも涙が零れた。涙を啜りながら話を続ける。

「それにしても、あんたはどうなってしまったんだい？ まるで別人だったそうだけど……お節さんは何も心当たりがないって云うし……どうしてあんなことをしたんだい？」

「俺が悪いんです。全て俺が……」

吉次はこれまでの経緯をぽつりぽつりと話した。お勢のこと、藤十郎のこと、多良屋を辞めさせられたこと、そして恨み地蔵のこと。恨み地蔵の応報でお勢の記憶がなくなるはずだったのに、母の記憶がなくなってしまった、と話した。吉次の話に、お竹婆さんは目を丸くした。

「そんな不思議なことがあるんだねえ」

「俺は自分の幸せしか考えない卑劣漢でした。お勢や藤十郎さんの幸せを一顧だにしなかった。それどころか、壊すことばかりを考えていた。藤十郎さんには本当に済まないことをしました、一番大切な人の記憶を消し去ってしまったのですから」

吉次の話聞いていたお竹婆さんが、何かを閃いたように顔を上げた。

「地蔵には何と願ったんだい？」

「藤十郎さんの中にあるお勢の記憶が全て消えますように、と」

今さら聞いてどうなるのだろうと吉次は訝った。

「そして藤十郎さんはお勢さんの記憶をなくした、なのにあんたはお節さんの記憶をなくした」

「ええ、そうです」

「恨み地蔵の応報は相応なんだろ？」

「ええ」と、尚も訝りながら吉次は答えた。

「だったら、あんたにとって一番大切な人はお節さんだったんだよ」

吉次はまた、ああ、と呻いた。気づいていなかった。今さらながらに悔やまれる。

「そんなお節さんはいったい何処へ行ったんだろうねえ。遠くへは行ってないと思うけど……」

矢も盾もたまらなくなり、吉次は再び月夜の闇に飛び出した。当てなどなく、母がいそうな村の近くをただ闇雲に歩いた。しかし何処をどう歩いても、吉次はお節を見つけられなかった。夜が深々と更けていく。

近くにいないとなると、残るところはひとつしかない。お節が行きそうには思えなかったが、吉次は夜が明ける前に城下へと歩き始めた。途中で夜は明け、一膳飯屋についた頃にはすっかり朝の陽になっていた。ひっそりとした静寂の中、吉次の戸を叩く音が辺りに響く。お勢はすでに起きていたようで、すぐに出てきた。

「こんな朝早くに何の用？」と、吉次を不審の顔で見る。

「お袋が来なかったらどうか？」

「いいえ、いらしてないけど……」

ここにもいなかった。これで捜せるところはもうない。多良屋が浮かんだが、行くわけがない。吉次はお勢にもこれまでの経緯を話した。そして地面に土下座して謝った。

「済まない。とんでもないことをしてしまった。藤十郎さんは俺が恨み地蔵に祈ったせいでお勢のことを何も覚えていないだろう。顔も声も、想いを告げた事実さえも……」

「何てことを……」

お勢は怒りで躰を震わせていた。顔を真っ赤にし、戸口をぴしゃりと閉めた。

土下座のまま、吉次はしばらく動けなかった。

もうここへ来てはいけない。藤十郎さんにも一度会ってきちんとお詫びしなければならない。

それにしてもお袋は何処へ行ったのだろうか？ 今何をしているのだろうか？

やおら起き上がった吉次の足は村へと戻りかけてとまった。峠の茶屋に女々しい手紙が残っている。あれを処分しなければ――。

朝の陽のきらめきが残る中、吉次は峠へとひたすら歩いた。このところ歩きづめで、昼を過ぎて峠の茶屋が目に入った頃には、吉次の躰は疲れ切っていた。足の感覚は失われ、目眩すら覚えた。

吉次は茶屋の前を通り過ぎた。仁念から手紙を返してもらう前にやることがあった。もう願掛けはするまいと思っていたが、恨み地蔵に最後の願いを託さねばならない。それが叶うのかどうかは分からない。恨み地蔵の叶えてくれる願い事が恨み辛みの類に限られているのであれば、到底叶わないだろう。

地蔵の前に立つ。

吉次は跪き、両手を地面についた。地蔵を見上げると涙が溢れ、嗚咽の中、地蔵に祈った。

「お袋に会わせてください！」

云ったあとで吉次は言葉が足りなかったと思い直した。

「無事にです。無事に生きているお袋と会わせてください」

精も根も尽き果て、がっくりとうなだれた吉次は最後の力を振り絞った。

「それから、勝手だとお思いでしょうが、藤十郎さんの記憶を元に戻してあげてください。あれは間違いでした。罰なら俺にしてください。どんな罰でも受けます。ですからどうかお聞き届けてください。お願いします」

地面に額をこすりつけ、吉次は祈った。すると全身の力が抜けていく気がした。躰を支えていた両腕からも力が失せていき、吉次は顔から地面に倒れた。意識が薄れていく。薄れいく意識の中で、きっと死ぬんだろう、これが最後の応報なんだな、と思った。一度にふたつのことを願ったために、応報も倍になったようだ――。

「気づかれましたか？」

目を覚ました吉次の目に、茶屋の仁念が映った。吉次は茶屋の板敷きに寝かされていた。

「俺はどうしてここに？ 地蔵に跪いて……」

起き上がろうとする吉次を仁念は押し留めた。

「気を失って倒れておられたんですよ。偶然通りかかった旅の人が教えてくれまして、ふたりし中へ運んだんです。最初はただの行き倒れに見えたんですが、吉次さんだと分かり、驚きました。てっきり死んでおられるのではないかと思ったんです、ですが、そうではないと分かり、ここへ運んだ次第です」

「お手数をおかけしました。そういえば、俺もこのまま死ぬんじゃないかって思っていました。死んでないところを見ると、応報ではなかったのかもしれないね」

「応報？ やはり恨み地藏に願掛けをなさっていたんですね。あんな場所で倒れておられたので、そうではないかと思っていたんです」

難しい顔をして仁念が咎めるように云う。

「約束を違えて申し訳ありません。ですが、今回は恨み辛みではありませんのでお許してください」

吉次が頭を下げると、仁念は仕方がないといった態で頷いた。

仁念が許してくれたので、吉次は早速ここへ来た目的を切りだした。

「預けておきました手紙を持ってきていただきたいのですが」

「ああ、あれですね。少々お待ちを」

仁念は奥の部屋に行き、すぐに戻ってきた。仁念の手にしっかりと握られた手紙を、吉次は懐かしそうに目で追った。

「これを受け取りに来られたということは、お勢さんのことは忘れてしまわれたのですか？」

仁念が手紙を渡そうとするが、吉次は受け取らなかった。

「いいえ、違います。お勢を忘れるために受け取るんです。こんなものがあっては未練たらしくてしょうがない。どうか燃やしてください。仁念さん、俺は自分が蒔いた種とはいえ、とんでもない目に遭ってしまいました。俺が忘れてしまったのはお勢ではなかったんです」

「といたしますと……」

「お袋です。情けない話ですが、俺は自分を産んでくれたお袋のことを何ひとつ覚えていないんです。まるでお袋がこの世に存在していなかったかのように、一切の記憶がないんです」

「それが恨み地蔵の応報だったんですね？」

吉次は小さく頷いた。

「村に帰った俺は、家にいたお袋の顔が分からず、追い出してしまったんです。あとでお袋だったのではないかと気づいたんですが、そのときはすでに手遅れで、何処を捜してもお袋は見つかりませんでした」

「何と……」

仁念が悲痛の嘆息を漏らす。

「それで最後の願いを地蔵に祈りました。もちろん、お袋に会わせてくれ、と。無事に見つかりさえすれば、お袋のことを思い出せなくても構いません。これから新しい記憶をいくらでも作っていきますから。仁念さん、俺は立派な商人になるのが夢でした。ですが、そんなものはどうでもよくなりました」

「夢を諦めてしまわれるのですか？」

「ええ。これからはお袋との思い出を作らなければいけませんから。見つければの話ですけれど」

「見つかりますとも。いくら恨み地蔵の異名があるとはいえ、地蔵には違いないんです。恨み言だけを叶える地蔵なんて赦せません。吉次さんの願いを叶えてくれなかったら、わたしがぶっ壊してやりますよ」

「それはいくら何でもやりすぎだ」

吉次が笑って云うと、仁念も笑った。

「お腹はどうです？ 空いていませんか？」

そういわれてみると確かに減っていた。鍋の中の芋を食って以来、何も口にしていない。

「背中がくっつきそうです」

「では、粥をお持ちしましょう」

仁念が板敷きを下りていくと、吉次は起き上がろうと試みた。お節を捜しに行かなければならぬ。だが、躰は云うことを聞いてくれなかった。節々が痛くて疲れがまだ残っている。それに死ぬほど腹が減っている。粥を食べれば少しは回復するかもしれないが、それにしても、いったいどれくらい眠っていたのだろう。地蔵の前で倒れて一刻が経ったのか、一昼夜が過ぎたのか、吉次にはまるで見当がつかなかった。明かりが灯っていないところを見ると、夜ではなさそうだと。

吉次が虚ろな目で辺りを見渡していると、仁念が粥を持ってきた。仁念に手伝ってもらって躰を起こし、粥を啜る。

「俺はどれくらい眠っていたのですか？」

「お運びしてから二日目の昼です」

「そんなに……」

吉次の箸がとまった。その間にも母がどんどん遠くに行ってしまったようで食が進まない。

「無理にでも食べないと元気が出ませんよ」

仁念に促されても、吉次の箸はとまったままだった。

そのとき、茶屋の戸口の開く音がした。

「もし、何か食わせて欲しいのだが」

客が来たようだ。

「はい、ただいま」と、仁念は戸口に向かって声を張り、板敷きを下りていった。しかし、慌てた様子ですぐに引き返してきた。

「例のお侍さん……藤十郎さんですよ。どうしますか？ 何もないと云って、帰ってもらっても構いませんが……」

仁念は、藤十郎が吉次を見たら怒って斬りかかるのではないかと恐れているようだった。

食べかけの粥を脇に置き、吉次は背中を伸ばした。吉次に、一も二もなかった。

「是非、こちらへ」

藤十郎が斬りたいほど怒っているのなら、それはそれで仕方のないことだ、と吉次は思った。それだけのことを自分はしたのだから。

仁念が大きく頷き、再び戸口へと引き返す。戻ってきた仁念の後ろに藤十郎が立っていた。板敷きにいる吉次を、何処かで見かけたような顔だ、と見ている。どうやらお勢は、藤十郎に吉次の話はしていないらしい。藤十郎が板敷きに上がると、吉次は腰を折り、頭を下げた。そして、自分が恨み地蔵へ祈った藤十郎への愚行を告白し、詫びた。

初めは渋い顔で聞いていた藤十郎だったが、その顔はやがて綻んだ。

「ほぼ決まりかけていた仕官がどういうわけか、突然閉ざされてしまったので妙だなとは思っていたのですが、そういうわけがあったのですか。しかし、仕官が叶わなかったのは一度や二度ではありません。おっしゃるとおりに恨み地蔵の靈験で仕官が叶わなかったのだとしても、回数が一度増えただけのことです。隣国で仕官が叶ったのですから、大差ありません。それにここだけの話、俸給は隣国の方がいいのですよ。あのままこの国で仕官が叶っていたら、少しばかり損をしていたところでした」

藤十郎の冗談に座は和んだ。吉次は自分の愚行を冗談でやり過ごしてくれる藤十郎に感謝した。やはりこの男には叶わないとはっきり認識させられる。己の完敗を認めた吉次は清々しかった。

「それで、大丈夫ですか？ 頭の方は。もう何ともありませんか？」

仁念が心配そうな顔を藤十郎に向けた。

「あのときはお世話になりました。お陰様で今は何ともありません」

「お勢のことは覚えておられますか？」と、吉次は訊いた。それだけが気掛かりだった。

「もちろんですとも。忘れるわけがありません。わたしが烏に驚き、山道から落ちて頭を打ったのは地蔵のせいだとお考えでしょうが、烏は人を襲うこともあります。確かに頭を打ち、しばらくものを考えられませんでした。昨日の朝、目が覚めると頭の痛みはすっかりなくなって、元のとおりにもものを考えられるようになりました。するとすぐにお勢の顔が浮かびました。何も心配なさることはありません」

一度は地蔵の靈験で記憶をなくしたようだ。そして一昨日の願いを地蔵はちゃんと聞き届けてくれたのだろう。だとしたら――

恨み地蔵の靈験が何もなかったかのようにい云う藤十郎に、仁念は不満そうだった。

「つかぬことをお伺いしますが……」と、藤十郎に問いかける。

「何でしょう」

「山道を踏み外される前、地蔵に祈っておられましたが、何を祈っていられたのですか？」

「決まっているじゃありませんか、新しく家族になるお勢と喜助殿の息災ですよ」

藤十郎が何か恨み言を云ったと思っていたのだろう、仁念は意外そうな顔をした。そして大きく頷いた。

「そうですね。そうですとも。そうでなくてはなりません」と、ひとりで勝手に納得している。

ふたりが話しているのを尻目に、吉次は別のことを考えていた。

地蔵は一昨日の、俺の願いを聞き届けてくれたに違いない。ならばお袋は、お袋は何処にいるのだろうか——。吉次は居ても立ってもいられなくなった。

「俺はもう行かねばなりません」

立ち上がろうとする吉次を仁念が押し留めた。

「お袋さんを捜しにですか？ その躰では無理ですよ。せめてあと一日は横になっていないと」

「お袋さんを捜す？」と、藤十郎が怪訝の顔で訊く。その顔に吉次は自虐の笑みを浮かべた。

「地蔵の応報ですよ。あなたからお勢の記憶を消し去ろうとして俺の中からお袋の記憶がなくなり、目の前にいるお袋が誰だか分からずに家から追い出してしまったんです。方々を捜し回ったんですが、見つからずじまいで……お袋の記憶も未だに戻りません」

「そんな酷い目に遭われたのですか」

藤十郎が心底気の毒そうに云う。吉次の心はもったいない気持ちでいっぱいになった。

「今頃は何処にいるやら。不肖の息子を嘆きながら彷徨っていることでしょう。一刻も早く……」

吉次は立ち上がろうとした。が、やはり足に力が入らない。ふらついて倒れ込む吉次を仁念が受け止めた。

「だから云わんこっちゃない。まだ無理ですって。それに何処を捜すって云うんです？」

「そうですよ。会う前にあなたがどうにかなってしまったのでは、お袋さんがあまりにも可哀想だ。ここはご主人の云われるとおりに、もう一日横になって安静にするべきです。幸いわたしは旅の疲れをとる薬を持っております。これをお飲みなさい」

藤十郎が荷物の中から薬を取り出す。

仁念は水を持ってくるよう藤十郎に云われ、厨へ向かった。

「あんな仕打ちをしたというのに大切な薬までくださるとは……何とお礼を申し上げてよいやら」

「まだ気にしておられる。わたしが気にしていないのですから、何も気にすることはありません。人は生きていれば誰かしらの恨みを買うものです。聖人君子でもない限り、知らないうちに誰かを傷つけてしまうことはあるでしょう。わたしも吉次さんを傷つけ、恨みを買ってしまった。突然横から現れて恋路を邪魔したのでからね、吉次さんがわたしを恨みたくなるのは理解できます。わたしが吉次さんだったら同じようにしたかもしれません。しかし、人を恨んだり憎んだりするのはもうやめにしましょう。結局ろくなことはありません」

「確かにろくなことはありませんでした」

藤十郎も人を恨んだり憎んだりすることはあるだろう。しかし、そんな邪心を抱かないよう努めている。自分もそうありたいものだ、と吉次は思った。だが無理かもしれない、とも思った。せいぜい、酒を飲んで忘れるのが関の山だ。

そろりそろりと、仁念が水の入った湯飲みを持って戻ってきた。藤十郎にもらった薬を飲む。まだ逸る気持ちが残っていたが、今の躰では如何ともしがたく、吉次は大人しく横になった。

吉次が次に目を覚ましたのは、その日の夕暮れだった。

薬が効いてきたのか、躰が軽くなった気がして吉次は半身を起こした。そこまでは何とか出来たが、起き上がるのはまだ無理だった。

仁念を探すと、仁念は薄暗い中、厨で夕餉の支度をしていた。

「藤十郎さんは何処です？ お礼を申し上げねば。お陰でだいぶよくなりました」

「あのあとすぐにお発ちになりましたよ。何でも、新居が決まったから急いで城下に戻って報せたい、とおっしゃっていました」

喜ばしいことだと、吉次は祝福したい気持ちが湧いた。その反面、一抹の寂しさも感じている。俺はまだまだだな——吉次は自嘲した。

「では、城下でお礼を述べるとしましょう。躰が元気になったら腹が減ってきました。仁念さん、早いところ頼みます」

「もう少々お待ちを。それにしても、藤十郎さんもお苦労なさったんですねえ……」

「何か話をされたのですか？」

「ええ、発たれる前にちょっとだけ。何でも、藤十郎さんの主家が滅んだのは藤十郎さんを始め、家臣たちの互いに恨み辛みがあったからだとか。功を競っていたのですが、それが悪い方へ働いてしまい、疑心暗鬼に駆られ、敵と戦う前に家臣同士がいがみ合っていたそうです。そんなだから戦に負けてしまうのだ、と苦笑しておられました。そんなことがあってから人を恨むのはやめにしたそうです。恨みを持ったために主家が滅んだのですから、そうも思いたくなかったのでしょう」

藤十郎にそんな過去があったのか。吉次は、ふっと笑みを零した。なるほど藤十郎も人の子、初めから達観していたわけではなかったようだ。

やがて仁念が膳を運んできた。吉次は飯を掻き込んだ。仁念が呆れて目を丸くするほど食った。

吉次が飯を済ませると、神妙な面持ちで仁念が吉次の前に座った。

「吉次さん、わたしはあの地蔵をどこぞの寺へ持って行き、人の目に触れないようにしようと思っています。人の心は弱い。あの地蔵はいたずらに人心を惑わせるだけです。恨み言を叶えてくれるのであれば、誰だって祈りたくもなります、頼りたくもなります。わたしは地蔵に祈る多くの人を見てきました。どの人もいい顔はしていません。陰鬱であったり、陰悪であったり——。せっかく平和な世の中になったのですから、もっと晴れやかな笑顔でいてもらいたいです」

「そうですね。俺のような邪心を持った者には、恨み地蔵は救い主に思えましたからね。俺の顔もきっと醜かったことでしょう。しかし.....地蔵がなくなると客が減ってしまうのではありませんか？ 地蔵目当てで来る人もいるでしょうから」

「減るでしょうね。ですが、仕方ありません。わたしは茶屋が繁盛するようにと、茶屋に立ち寄った人に恨み地蔵の話をしました。人の不幸を商売に利用しているようで、前々から後ろ暗くは思っていたのです。今回の件で決心がつけました」

「客が減るかもしれないと云いましたが、ひょっとしたら逆に増えるかもしれませんよ。いえ、きっと増えるはずです」

仁念が怪訝そうに吉次を見る。

「そうはまたどうして？」

「平和になった今、これからも旅をする人は増えるはずです。この茶屋も必要とされ、賑わうことなるでしょう」

翌朝、吉次は茶屋を発った。昨日まで寝込んでいたのが嘘のように、躰の調子がすこぶるいい。天気もよかった。だが、心はまだ晴れていない。城下へ帰る前に、吉次は地蔵に寄り、藤十郎と同じように母の無事とお勢たちの幸せを祈った。

躰の疲労が癒えた吉次だったが、普段どおりというわけにはいかず、休み休み向かったので城下に着いた頃には昼をだいぶ過ぎていた。

お勢の飯屋による。お勢は藤十郎と仲良く話をしていた。藤十郎に礼を述べ、藤十郎がいたわりの言葉を返すと、旧知のようなふたりを見て、お勢が不思議そうな顔をした。

お勢と藤十郎に見送られ、吉次は飯屋をあとにした。

さて、何処を捜すか——。

当てはない。いるわけがないと思いつつ、吉次の足は多良屋に向かった。顔を出したくなかったがそんなことは云ってられない。ひっそりとした店先をふと見ると、弥平が掃除をしていた。大旦那への告げ口が思い出される。吉次は弥平にそっと近づき、その頭を殴りたくなった。

「庄助さんを呼んでくれ」と、殴る代わりに声を掛ける。

吉次の突然の姿に弥平は驚き、道の向こうへ逃げようとした。が、吉次のその気がないと分かり、怯えた目を見せただけで店の中へ消えていった。庄助はすぐに現れ、懐かしそうな顔を見せた。吉次が来意を告げると、庄助は顔を曇らせ、首を振った。やはり多良屋には来ていなかった。

「俺も手伝ってやりたいが、大旦那様が急に亡くなられてな、いまは大変なんだ」

大旦那が亡くなられた。道理で客の姿がなかったわけだ。世話になった大旦那の死去に、吉次は泣きそうになった。庄助の話では、大旦那は二日前に亡くなられたということだった。

沈痛の面持ちで多良屋の前を去った吉次は、偶然出会うかもしれないと、藁にも縋る思いで城下をひと周りした。通りは人で溢れ、相変わらず賑わっている。滅多に行くことのなかった、飯屋の反対側へも足を伸ばした。しかし、そんな偶然が訪れるはずもなく、吉次は虚しく天を仰いだ。すると、遠くにある楠の大木が目に入った。そういえばあそこの神社に昔行ったな。まだ多良屋に奉公に上がる前に、神社の秋祭りに行った覚えがある。軽業師がいて、多くの出店が参道を埋め尽くしていた。出店を覗き込んで買ってくれと駄々をこねた。叱りつける父がいて、それを面白がる兄がいた。もうひとり——お袋がいたはずだが思い出せない。父が兄の手を引いていた。俺はお袋に手を引かれていたはずだが、そのお袋の姿が浮かんでこない。

まだ思い出せないのか——。

藤十郎はお勢のことを思い出したというのに、母を思い出せないのはどういうことなのだろう。地蔵の霊驗、応報など初めからなかったのか。それとも三日前の、お袋に会える、藤十郎がお勢を思い出す、そのふたつの願いは一度に行ったからひとつとして勘定されたのだろうか。ならばお袋には会えるのだろうか。それとも会えないままでお袋を思い出すのだろうか。どうなるのだろうか。これから何か起こってくれるのだろうか。何も起こらないのだろうか。考えていた吉次は、はたと閃いた。嫌な考えが頭をよぎった。大旦那の死去は恨み地蔵の応報ではないのか。お袋に生きて会わせてくれと頼んだ、その応報で大旦那は死んだのではないか。大旦那は父を亡くした吉次にとって父親代わりのような存在だった。もしそうならと思うと、吉次は胸が痛んだ。地蔵が憎くてたまらなかった。そんな憎悪を抱いた胸中に、小さな明かりが灯った。だとしたら、お袋に会えるのではないか——そう思った。それは、嬉しくはあったが喜べることではなかった。そしてまた、他の考えも浮かんだ。藤十郎がお勢を思い出したのなら、その応報で俺はまた誰かを忘れてしまうのではないか——。

城下から村への道を吉次は歩いていた。少し足が痛み始めた。辺りは薄暗くなってきており、先から来る人も後ろから来る人もなく、道に吉次はひとりだった。月明かりが道の先を照らしている。秋祭りの帰りも月が照っていたな、道の途中に野犬がいて——と思いだしながら歩いていると、あのときのままだに野犬がいた。腹を空かせているようで、喉を鳴らしながらひたひたと近づいてくる。道端に木の棒でも落ちていないかと目をやるが、武器になりそうなものは何も落ちていない。仕方なく小石を数個拾った。当てる自信はなかったが追っ払えるかもしれないと思い、近づいてくる野犬に小石を投げつけた。野犬は逃げなかった。当たらないのを確信しているかのようだ。

「どけ、どけ。そんなもので腹を空かせた野犬が逃げるものか」

誰もいなかったはずなのにといいながら吉次が振り返ると、そこにいたのは父だった。父は吉次の前に立ちはだかった。

「人間様が一番偉いってことを思い知らせてやる」

その手には多良屋で買ったばかりの鎌が握られていた。鎌を構え、父がずんずん野犬に近づいていく。野犬は父の気迫に気圧され、後退りを始めた。

「お前なんかどっかいっちなえ」

後ろから子供の声がした。吉次が目をやると、兄が後退る野犬を睨みつけていた。兄の横には女がいた。父の顔も兄の顔も昔のままに見えるのに、女の顔だけが判然としなかった。

あれはお袋か？ そうとしか考えられない。

吉次が尚もその女の顔に目をやっていると、臃気だった女の顔は次第に輪郭をはっきりしてきて、目鼻立ちも分かるようになった。そこにあった顔は、吉次が家を追い出した、年老いた女の顔だった。

野犬が去っていき、父と年老いた女が話をしている――。

お袋！

思わず叫んだ吉次の目から、すうっと母の姿が消え、父が消え、傍らにいた兄も消えた。

吉次は駆けた。

絶叫を発し、泣きながら駆けた。

もうお袋の記憶を取り戻すことはないだろう。

そしてもうひとり、誰かの記憶をなくしてしまう。吉次はそれが恐ろしくてならなかった。

村に入り、我が家が近づいてくる。一時の激情が治まり、吉次はゆっくりと歩いていた。明日からどうすればいいのだろう、と思う。

恨み地蔵に霊験があったとしても、所詮、恨み地蔵というくらいだから、恨み言しか聞いてくれないのかもしれない。お袋に会いたいと願っても無駄だったのだろう。藤十郎がお勢を思い出したのは、何処かでまた頭を打ちでもしたんだろう、それだけのことだ――。

月明かりの中、吉次はとぼとぼと歩いた。歩く度に溜め息が漏れる。

と、白い道の向こうに明かりが見えた。

我が家に明かりが灯っている。

お袋か？

お袋に違いない。

あの明かりの下にお袋がいる。お袋が戻ってきたんだ。

吉次の胸は高まり、熱いものが込み上げてきた。

吉次は駆け出し、我が家の戸口に立った。戸口に手をかけると、急に怖くなった。

この四日間、お袋は何処を彷徨っていたのだろう。息子の血も涙もない仕打ちに心を痛め、何処かも分からずに彷徨っていたに違いない。家を追い出した息子を、お袋は許してくれるだろうか。やっと会えるというのに、お袋が許してくれなかったら、俺はどうすればいいんだ。

恐る恐る戸口を開け、中を覗く。お節は吉次の着物を繕いながら、悄然と板敷きに座っていた

。

「お袋……」

卑屈にうなだれる吉次を戸口に認めたお節は、持っていた着物を脇に置き、土間へ下りてきた

。

「帰ってきたんだね」

お節は板敷きを下りてきて、淡々と吉次を迎えた。全てを許したように、母が優しい笑みを浮かべてくれ、吉次はほっと息を吐いた。それでも心は後悔に満ちていた。

「ごめんよ。怒ってないのかい？」

「怒るって、どうして？」と、お節が不審の顔で訊く。

「俺が酷いことをしたからだよ」

「酷いこと？ しばらく帰ってこなかったことかい？ そんなのいつものことじゃないか」

しばらく帰ってこなかった——どうということだろう。何か変だ。

「しばらくって、いつ以来だったかな？」と、試しに訊く。

「確か半年前だったんじゃないかい、お前がこの前帰ってきたのは」

半年前？ やはり変だ。お袋は何か勘違いしているのだろうか。

「違う。半年じゃなくて半月ほど前だ、覚えてないのかい？」

「何を云ってるんだらうね。人を糞碌したみたいに云って」

付き合いきれないといった態で、お節が板敷きに戻る。俺を気遣っているのだろうか。俺が気に病まないようにと惚けているのだろうか。しかし、吉次にはお節が全てを知った上で惚けているようには見えなかった。お袋はどうやら本当に覚えていないようだ。

お節のあとを追って板敷きに上がった吉次は、お節がさっきまでの話をしたがっていないのは分かっていたが、やめるわけにはいかなかった。

「俺はお袋を家から叩き出した。四日前の夜だ。それも覚えてないのかい？」

「お前はさっき帰ってきたばかりじゃないか。それに、わたしを叩き出しただなんて変なことを云うねえ。お前がそんなことをしないのは知っているよ」

やはりお袋は覚えていない。これはどういうことなんだろう。

まさか——

恨み地蔵の応報なのか？

しかし、藤十郎はお勢のことを全て思い出しているのに、お節が吉次のことを忘れてるのは最近のことだけのようだった。応報にしては偏っている。

「お勢って女を知っているかい？」

「城下の一膳飯屋の娘さんだろ。知ってるよ」

お勢のことを話したのは半年前だった。その時点までは覚えているようだ。

「俺が多良屋を辞めさせられたのは？」

「そうなのかい。そりゃ残念だったねえ。立派な商人になるのがお前の夢だったのにねえ」

商人の夢は昔から話していた。やはり最近の俺を覚えていない。どうして相応ではないんだ？

いや——

そもそも、藤十郎とお勢が知り合ったのは最近のことではないか。ひと月半前のことだ。藤十郎がお勢の全てを思い出すといってもその期間に過ぎない。おそらくお袋が俺を覚えていないのは、このひと月半のことだろう。

合っている。

相応している。

恨み地蔵の応報だ。恨み地蔵の応報で、お袋は俺の一部を忘れてしまった——。今度はお袋が俺を忘れてしまった。それはほんの一部に過ぎないが、吉次には衝撃だった。息子に忘れられてしまった母の気持ちが痛いほど分かる。しかもあのときはお節は吉次に顔さえ忘れられていた。

「帰ってきてからいろいろ訊くけど、どういうわけだい？ 何かあったのかい？」

さすがにお節の顔は不安に満ちていた。探るように吉次の目を見ている。

吉次はこのひと月半に起こった出来事の全てを話した。

不思議そうに、まるで夢物語を聞くかのように吉次の話に黙って耳を傾けていたお節が、吉次の話が終わると、そういえばと話を切り出した。お節にも思い当たる不思議なことがあるらしい。

「三日前のお昼頃、おかしいことがあったよ。どういうわけかわたしは川岸に立っていてね、どうやってそこまで行ったのか、何のために行ったのか、さっぱり分からなかったんだ。知らないうちに足や腕には擦り傷があるし、いよいよ惚けが始まったのかと思ったよ。家に帰ると隣の熊八さんが心配そうな顔で来て、親子喧嘩もほどほどにして云うんだ。お前は城下にいるはずだからそう云うと、もう戻ったのかって驚いてね、わたしが、戻るも何も吉次はこの半年帰ってきてないって云うと、変な顔でわたしを見ていたよ。惚けたとでも思ったんだろうね。それじゃお前は熊八さんが云ったように帰ってきていたんだね。わたしを叩き出したっていうのも本当のことのようにだね」

「済まない」

「いいよ、わたしは覚えていないんだから。それにしても、どうして川になんか行ったんだろ？」

お袋は絶望のあまり、山を彷徨い、川へ身を投げようとしていたに違いない。俺はお袋をそこまで追い込んでいたんだ——。

吉次は肩を落とし、うなだれた。地蔵への願いがあと少しでも遅かったら——

「たぶん……」と云いかけたが、怖くて口に出来なかった。お節も自分が何をしようとしていたのか、察したようだ。息を呑み、一瞬、顔を強張らせせた。

「全ては地蔵の応報だ。いや、俺が悪いんだ。俺がつまらない邪念を持ったばかりに……」

「地蔵とはいいながら、人の恨み言を叶えるなんてとんでもない地蔵だね。お陰でわたしはこのところのお前を覚えていなし、お前はわたしの昔を覚えていないし……」

「それが応報だから……。恨み言を願う人の方が悪い」

「それにしたってお前……」

不意に何かを考え始めたお節が顔を綻ばせた。

「でも、地蔵の応報とやらは悪いことばかりじゃなかったね」

自分の命が助かったことをいっているのかと吉次は思った、しかし、それは吉次が願ったことであり、応報ではない。不審がる吉次にお節が云った。

「お前に家を叩き出されたときの記憶を消してくれたからね、それだけはよかった。そんなことは覚えていたくないからね」

お節の屈託のない笑顔に、吉次も泣き笑った。

地蔵は母を助け、家に戻してくれた。母から一番嫌な記憶を取り除いてくれた。仁念が移す前に、お礼参りに行かなければ。大旦那にも線香を上げなければならない。

「それじゃ……お勢さんたち親子は隣国へ行くのなら、一膳飯屋は手放すのかい？」

お節がそれまでとは違った話を唐突にした。

「そうするだろうな」と、お節の真意を掴みかねないまま吉次は答えた。

ふうん、と息を漏らしたお節は、何かを思いつき、それがいかにも嬉しそうだった。

「せっかく板壁を直してくれたけど、無駄になってしまうかもしれないねえ……」

遅くまで話をするふたりに、夜は深々と更け、月が闇を照らし続けていた。